

547
226

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



映畫寫真連鎖小說

人間



大正
14. 12. 16
春 内交 本

544-226

序

人間？

それは、奇しくも不可思議なる運命のもとに生滅する生物である。
運命。

それこそは、人間の一生を貫くところの、ほとんどすべてであるともい
ひえやう。而して、その運命の徑路を彩るものは？ それは戀と、金であ
らねばならぬ。恐らく、人間のすべての葛藤と、紛糾とは、この二ツに原
因して現はれるともいふことが出来やう。

この一編は、さうした、戀と金との暴逆を、マザ／＼と描き出だして見
たいと試みた。

著

者

人間目次

1

八	七	六	五	四	三	二	一
燒野の雉子	浮世の風	涙のいろく	粹神の糸	もつれ胡蝶	美に憧憬るもの	悪女街	鶴のおとし子
.....
一三九	一一五	一〇〇	八三	六一	四一	二一	一

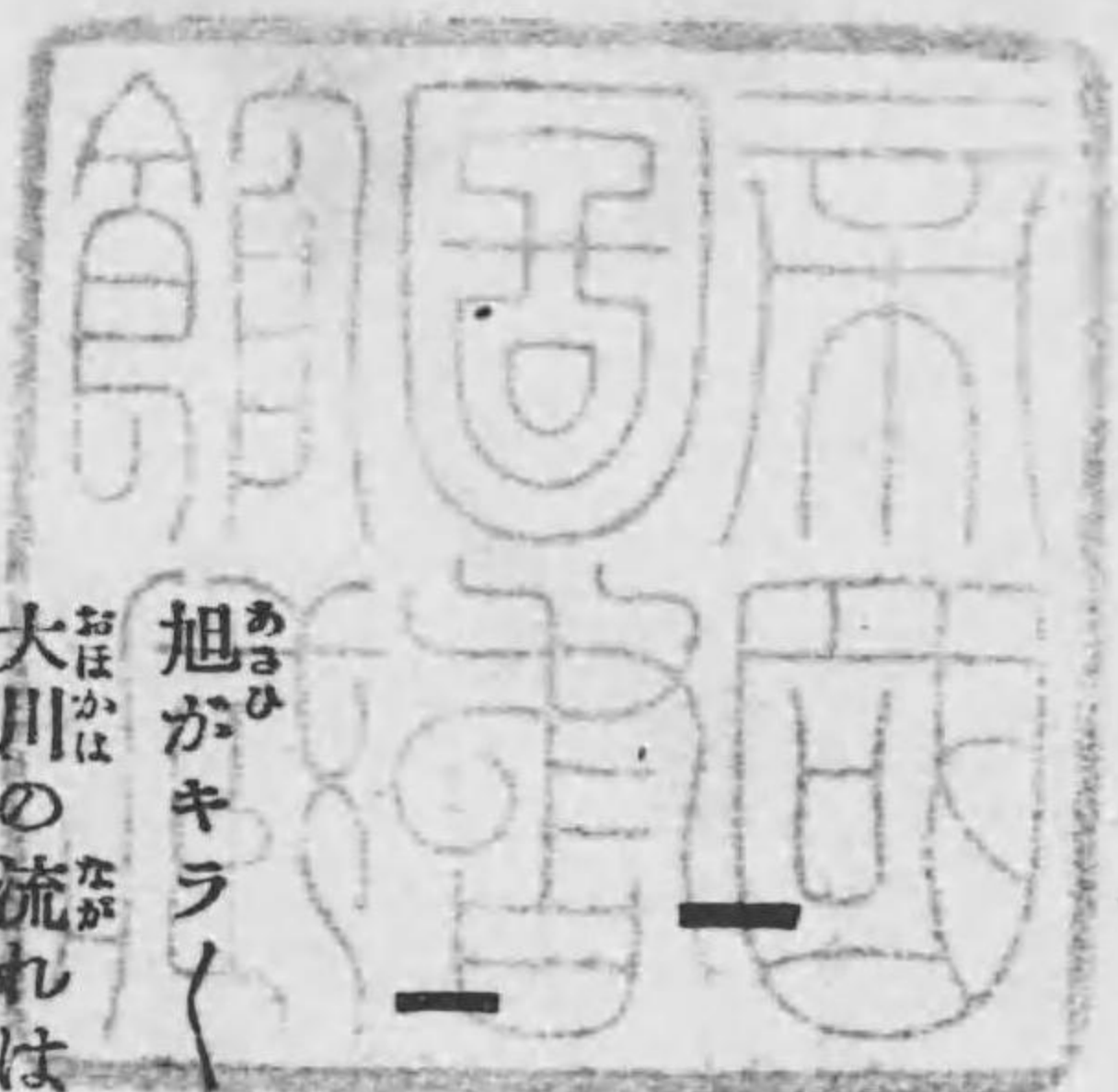
九	戀 <small>こひ</small> の策 <small>さく</small> 戦 <small>せん</small>	一五九
十	淪 <small>りん</small> 落 <small>らく</small> の渦 <small>うず</small> へ	一八一
十一	悲 <small>かな</small> しみと喜 <small>よろこ</small> び	二〇三
十二	蕾 <small>つぼみ</small> 吹 <small>ふ</small> く風 <small>かぜ</small>	二一九
十三	愛 <small>あい</small> 戀 <small>ねん</small> のいろどり	二三〇
十四	離 <small>り</small> 合 <small>がよ</small>	二五二
十五	勝 <small>しょう</small> 利 <small>り</small> と悲 <small>ひ</small> 哀 <small>あい</small>	二七七
十六	人 <small>じん</small> 間 <small>げん</small> と運 <small>うん</small> 命 <small>めい</small>	二九一

目次終



映畫寫眞
連鎖小説
人間

藤本千春著



鶴のおとしし

旭がキラ／＼と輝いてゐる。村の鎮守様の祭りの朝である。

大川の流ればトロ／＼と金泥色に流れて、スツキリとした蒼い空に、クツキリと落付いた田舎の景色が、心ゆくまでに現はれてゐる。川向ひの村落が、描いたやうに、杉の木や、竹の林のなかから、藁葺きの屋根を覗かせて、六十間の川幅を控へて、眞に繪に見るやうな景色である。恐らくかうした景色は、太古のまゝかも知れ

ぬ。が、ときをり通る川蒸汽船の、水掻きの音を立て、タツ／＼と滑つて行くときには、なんとなく、開化の世といふやうな感じがする。けれども、やはり村人に懐かしいものは、荷足舟の静かな水音、さては情趣のある引き舟の掛け聲である。が、それよりも、もつ／＼村人には懐かしいものがあつた。それは平助爺やの渡舟である。渡舟を見ると思ひ出さすのは爺やがとこの薫である。

薫は、とつて十八。番茶の出花といふ年であるが、これは番茶どころか、玉露の出花ともいほうか。清楚とした面立ち、澄んだ柔はらかい眸が、鈴のやうに清い輝きを漂はすのである。實際、薫は綺麗な娘であつた。白玉のやうな肌の色に、かすかに若い娘の輝かしい誇りの色、名匠のホンノリと刷いたかと思ふやうな顔の色。赤いツヤ／＼とした丹花の唇、スンナリとした指、愛らしい足の彫刻に見るやうな指の感じ。とても彼の女は、このひなびた田舎になぞ見られぬほどの娘である。村人は、彼の女を鶴のおとし子といつた。

平助爺やは幸福ものである。爺やは、も一人娘を持つてゐる。それはお松といふやはり十八。これとても、この薫さへるなかつたなら、村の評判者になるだけの織標は充分にある。爺やは二兒だといつてゐる。が、二人の氣品は、とてもこの二娘が双生兒だなどとは思はれなかつた。

平助爺やの家は、すぐ川前の平屋づくり、ノシ葺の一軒家である。村の鎮守様へは、爺やの家の側へ外れた村道へ入る。つまり入口といつたとこなので、村人は大勢で、その入口の両側へ棒杭を打ち込んで、宮の幟を立てやうといふところである。棒杭を二本擔いだもの、大きなカケヤを擔いだもの、鶴バシや金挺を擔いだものなど、がや／＼喋りながらやつて来た。

そのとき、薫はひとり河原の棒杭に後手をかけて、その涼しい眼で村の人達の來るのを見てゐた。

「イヤウ。女神が立つてゐるぜツ。アノ眼の輝きを浴びて、お祭りの仕事をすな

んで、よつほど冥加に叶つてゐるぜえ」

縞の鐵砲半てんに、黒い兵兒帶をグル／＼巻きにした、眼のクル／＼した五分刈頭が、棒杭をゴソツと音たてながら、伴れのものを見かへつていつた。ハヅミに往還の石塊に躓いて、オヤツといふ間に、ガラリと棒杭を投げ出した。棒杭は跳ねかへつて、コロリと足の上へ打ちつかつた。

「ア痛ツ。畜生、痛いナア」

若者は、ベトリと蹲つて、ベツと唾を掌へ吐きつけると、グチャ／＼に足の甲を揉みたてる。

「どうしたい。甚的、怪我したかい」

「インヤイ。もういゝや」

甚的は、エンヤラサツと、棒杭を擔ぎあげた。

「縁起が悪いな、お祭りの朝つから痛い目に遇つちや、やりきれねえや」

甚的は心持ち跛足を引きかげんである。

「フ、、あんまり手前が、薰に、柄にもねえ色目を使ふから、神様の罰が當つたんだ」

甚的は、ヂクリと首をすくめた。

「オイ／＼、あんまり大きな聲を出すなよ、薰が聞いてゐると、俺アきまりがわるいや」

「アハ、、こいつ巫山戯るな。薰が手前なんぞ相手にするもんけい」

「だつてよ……」

「フ、、だつてよ、戀に上下の隔てはねえとけつからア」

「ウフ、」

「厭な笑ひをしやがるナア」

若者たちは、ワイ／＼いひながら来る。

「薫ちやツ、お早う。いゝお祭りだのう」

與之八どんがとこの兄んにやアが、さも自分は薫と親しいといふことの自慢さうに、首をあげて、ニッコリと笑つていつた。

「みなさんして、ごくるうさまねえ」

薫は嫣然と笑つた。

若者たちは、角刈頭のハイカラ正二が、村の天女の一人め氣取りを、まんまと裏切られて、平等大恵に、みんなに愛嬌を見せられたので、ゾクリとして、いづれも正二の横顔をちらと冷かに笑ひ氣味を投げながら、

「お早う〜〜」

と、元氣よくいつた。正二先生、ちとてれ心地に、グニヤリとした。

「松ちやは？」

正二は氣轉に、片割れ娘のお松のことを訊きかけた。

「家よ」

「後に遊びに来な、宅のおたかも來てるよ」

「有難うよ」

若者たちは、ヤットキタと、擔いたものを投げ出すと、一人が鶴バシで、

「ウンシヨ」

と、幟をたてる地點を見はからつて、ヅシンと打ち込んだ。一ツ三ツ。いゝころに掘れる。

「いゝかな甚的」

「ウン、よからうや」

甚的は棒杭をとつて、ドシリと兩手で、掘られた穴のなかへ差し込んだ。

「巧えぞ。オイ猪之公、打ち込んでくれや」

「オイシヨ」

猪之公は、ヤツと大カケヤを振りあげる。

「猪之公。氣をつけてくれや。俺アの頭撲られる日にや、大變だぜツ」と、甚的は棒杭を真直ぐに抑へてゐる。

「心配するな。見當はいゝぜツ」

ウンと、猪之公が打ち込む。ズシリと棒杭が埋り込む。

「巧えく、も一ツ」

「ヨイシヨ」

ズシン。

「よかべい〜」

若者たちは、二本の棒杭を打ち込むと、

「さア、柱だ。オイ、早くしてしまはうや」と、ドヤ〜と道具を持つて立ち去つた。

三

そのとき家のなかから、お松がキチンと、髪を銀杏がへしに、トロリと油の光りを見せて出て来た。

「姉えちや」

入口に立つと、お松はまづ薫の顔を見て、ニツコリと笑つた。

「松アちや、お出で」

薫はヒラ〜と白い手をハタツカせていつた。

お松はハタ〜と、今日はお祭りの塗下駄をもう持ち出したのか、カラコロと出て来て薫のそばへ来た。

「いゝお天氣だこと」

「いゝあんばいね」

「オヤ、お宮の森に、提灯が張られたこと」

「さうねえ」

「姉えちや、いまに見に行く」

と、お松は薫の顔を覗く。

「……………、どうしようかね」

「二人で行かうよ。お猿の芝居、繰り人形なんか、面白い見せものが來てゐるわ。

ホーラ、金色夜叉のノゾキも來てゐるしね」

お松は、もう祭り氣分に浸つてゐる。が、薫は温順な性質から、そうした盛り場へは、あまり氣がすゝまぬのであつた。

「さうお」

といつたが、あまり氣乗りもせぬらしく、お宮の森の方をうつとりと眺めた。

お松は薫の氣持ちとは反對な氣持ちで、いつか薫の肩へ片手をかけて、おなしやうに、お宮の森へ眼を投げてゐた。

そのとき、少し離れたところへ、いつの間にか、二人の男が立つて、二人の姿をジロリ／＼と窺み見ながら、なにやらヒソ／＼と立話しをしてゐるのであつた。

一人は眼の凄い四十位の男。對の絹物の衣類に中折帽を冠つて、黒い折靴を抱へてゐる。どうも都の人らしい。そして、も一人の方は、鼠つぼい服に、黒いツボン

を穿いて鳥打帽を冠つてゐる。

四十男の凄い眼の光りが、剃刀のやうに二人の顔や、容姿を見るのであつたが、二人には、それとも氣づかぬのであつた。

二人の男は横眼で二人を見ながら、ヒソ／＼話しをしながら、時折りニヤリ／＼

と笑ひをこぼしてゐた。

やがて、四十男は、三十男の烏打ちの男の肩をボンと打つた。

「いゝかい？」

「大丈夫でさア。そんなことには抜かりはねえんで、ちやんと、金グツツが喰はせてあるんですからね」

「さうか、ハツ／＼／＼」

二人はカラ／＼と笑つた。

唐突けの笑聲に、薫とお松は、ビクツとして振りかへつた。二人の男はその二人の顔を見て、ニヤリと笑つた。と四十男は、

「まア、多賀谷さん、そこへらで、一杯飲もうぢやありませんか。飲みながら、ゆつくりお話しませう」

といふと、二人は肩を並べて立ち去つた。

四

そこへ村の若い衆たちは、ヨツシヨ／＼と、幟の柱を擔ひて來た。

「ホラ來た。ヨシか三太、卸すぜ」

「ウン、待つて呉れや。オイ由松、ちよつと手を掛けて呉れ」

「オツ、よし來た」

由松が手に唾つけて、ウンと柱の根の方の吸口の端へ手をかける。

「サ、退いた」

「オツ」

三太が、スツと肩を抜くと、由松は、

「甚的、却すぜ」

「オ、いゝとも」

由松は徐々に柱を地につけた。甚的はスツと腰を落すと、柱の端へ両手をかけて肩をスポリと外づすと、クルリと身をまはして、ズイと柱を地に寄せると、カラリと地へおろした。

やがて若い衆たちは、ワイシヨ〜と柱を打つ立てると、幟を、カラ〜と一人が繩を引いて引き揚げると、一人が竹の輪へ幟のチを一ツ〜に結びつける。

柱と柱の中間へは、御神燈の角燈籠が釣るされ、それからズツと、平助爺やの家の廂の隅へ、ズツと酸漿提灯を連らねた繩が張り渡される。

薫とお松は、なにかしら賑ひだ明るい氣持になつて、自分の家のお祭り裝飾のなかへ入るのを見て、顔を見合せて笑つた。

「薫ちや、松ツちや。頼むよ」

張り提灯の繩の端をもつた若者は、二人の娘の顔を見て笑ひながらいつて、廂の隅へ、グル〜と結びつけた。

そのとき、障子のうちにゐた平助爺やはノツコリと障子戸を開けて顔を出した。

「ヤレ〜お天氣でいゝあんばいだな」

といひながら、ぼと〜と縁側へ出た。

「こらまア、皆の衆、御苦勞さんでござんす……」

と、若い衆たちに小腰をかゝめて挨拶する。

「や、爺ツつア、朝つばらからおやかましいのう……」

正二がみなを代表して口を肯く。

「お早う〜」

若い衆たちは挨拶をかへす。爺やは笑ひながら、小首を動かしながら、正二の方を見て、

「や、兄んちやま、お早うございます。今日は御苦勞さんで……」

「お天氣でいゝのう」

「ハイ、結構なお祭りでございますて」
 轎立てが了つたので、若い衆たちは、ドヤ／＼と宮の方へ立ち去つた。
 平助爺やは縁側へ後手に両手を組みながら、ちよつと腰をかかめかげんにして、
 川面の景色を見やつたが、いつかその眼を、二人の娘たちの方へやると笑顔がたゞ
 よふ。

五

お宮では、ソロ／＼お祭りがはじまるのか、太鼓の音が賑やかしく響いて来た。
 そのとき、木綿のゴツ／＼した、折目のキチンとついた千本縞の着物を着た五十
 餘りの老爺が懐手になつて、さもお祭りらしく呑氣な顔で、フラン／＼と歩いて
 来たが、二人の娘を見ると、
 「薫、お松、お天氣でいゝのう」

と、ブツキラ棒だが、親しみのある調子でいつて、人のよさ／＼な笑顔を見せた

「爺ア、お天氣でいゝのう」

薫は、ニツコリとしていつた。

「お前、そんな手拭なんか冠つてゐねえで、髪でも結つたらどうだ、お祭りでねえか」
 餘計なことを老爺は薫に向つていふ。それも眞實な感情からの言葉である。

薫はやつぱり無邪氣な顔で笑つてゐる。

「ア、平助どん、お天氣でいゝのう、結構なお祭りでございますハイ」

田舎もの、仁儀とかで、祭りの挨拶だけは改つて、丁寧にいふ。

「ハイ、結構なお祭りでございます」

平助爺も丁寧である。そして、

「一服、喫はつしやんないか」
 といふ。

「ハア、有難うござんす。ドレ、一服喫はうかのう」

老爺は縁側へ立ちかゝりながら、節くれだつた指で、腰に差した三河ガマスの煙草入を抜きとると、ドタリと腰をおろした。

「ア、待たつしやれ。うすべりでも布かせやうし」

「構はつしやるな」

「オイ、お松やア」

と、平助爺やは、二人の娘の方を見て、お松を呼ぶ。

「爺ア。なんだの」

と、お松は、ちらと見る。

「うすべり出してくれや」

「松ちや、俺れが出してやるわ」

薫はバタ／＼と走つて来た。すぐと家のなかへ入つた。

「お松の餓鬼、しやうのないやつだな」

呼ばれたお松が来ないで、薫を來させたので、爺やはかういつて、しかし笑つた

「お前とこの薫は、ほんとにいゝ子だ。平助どんは幸福もんだ。アンナイゝ娘を持つて……、なう、爺ツツア、お前とこのおッ嬢アは、今年、何年になるかの」

「早いもんだ。もう今年が七年だアし」

「まア、そんなになるかのう……早いもんだのう……ほんとに、今、おッ嬢アが生きてゐたら、どんげにか喜ばしやろうかのう」

「死ぬもの因果の、残るもの貧乏だのう」

「ほんとに、死ぬこと考へると、つまらねえのう」

「なにもかも、みんな前生のやくそくごとだからのう」

老人の話は、とかく妙に淋しくおちる。

そのとき、薫は一枚の花筵を抱へて出た。

「爺ア。退いてくらつしやえ、うすべり布くのよ」

「ア、こらく、ありがとく、ほんとにこの薰はい、緻縹だ。宅の猪之が、もちつと氣の利いたやつだつたら、ほんとに嫁に貰ひていもんだがのう」

と、老爺は笑つた。

平助爺やは、淋しさうな笑ましさうな變な顔をした。

薰はサツと顔を赧らめて、厭なといつたやうな笑ひをして、花筵を布くと、粗末な煙草盆を出して、引つ込んだ。

「緻縹といひ、氣だてといひ。ほんに鶴のおとし子のやうだ」

と、老爺は感心したやうなけぶりて、撫子らしい黒い刻煙草を、眞鍮煙管へ詰めて、首をかめて、ブカ〜と喫つた。

「生れは、しかたのねえものだ」

と、うかと爺やは呟いた。

「エ、」と、老爺が訊きかへす。
「イ、えし」。爺やは、うち消した。

二 悪女街

田舎のお祭りは、ノンビリとした骨休め、どこの家にも櫻燈籠をさげて、家のなかも、スツキリと取り片づけられ、せめてもの日頃の慰安である。

平助爺やもその日は、かつて眞名子家にゐたころ、殿様から頂いたお古のイチラクの裕を出して、昔のことなどを思ひ出しながら、夕飯の膳に向つた。

料理は可愛い二人の娘の手づくり、笹餅がへぎに盛られて、部屋のまんなかに出され、勝手もとから運んでくれるお銚子の酒も、今日はまた格別に美味いといったやうに、二人の美しい娘を前に、チビリ〜と杯を甜める爺やは、眞に幸福らし

「ヤレ〜、いゝ祭りだ。鎮守さまは、どんなに賑かだらうな。……踊りがはじまつてゐるな……ハツ〜、若い衆は蓬萊だ」

と、爺やは笑つた。

「爺ア、いまに行つて見て来るといゝわ」

薫がいふ。

「ア、さうだの、俺ア、あとで行つて見る、お前達二人で見て来たらいゝ」

「おら二人は、さつきお舞ひを見て来たから、もう行かんでもいゝねえ。松アちや」
薫は白い腕をノべて、笹餅を一ツ抓むと、

「一ツ食べやう。松アちや、どう」

と、柔しく見る。

お松は賑かなお宮のことが思はれて、もう行つて見たくてならぬのである。いろ

いろな繪燈籠が參道へツツと立てられて、それにポーツと灯がともる。どこの誰れやらが衣裳とぼして、出来るだけ立派にして、珍らしく白粉を塗つて、駒下駄を穿いて、そして見世物を見たり、露店のももの珍らしい商品を見歩いたり、そして、若い衆たちの面白い踊りを見られる。

「おらも食べやうか」

お松も、一ツ抓んだが、祭りの夜の光景が眼に浮ぶ。

イヤア——ア、ツ

でつこい娯ア持てばア——ツ

二百十日のウ——オツ

荒風よけだア——ツ

一本木の兄んにやが、ツバぬけた胴魔聲で唄ひ出したので、聞いてゐたものゝ誰

れもが腹を抱へて笑つた。踊り子の若い衆は、かへつて調子づいて、

ハ、ヤツテクレてばヤツテクレ

と勇みたて、十人ばかりの頬冠り連が、手拍子足拍子をとつて、夢中になつて踊つてゐた。

それから村の誰れかれが、祭文をやる、阿房陀羅經を讀む、唄よみが始まる。どれも自慢で、どこそこの兄んにやとか、どこそこの弟つちやだとかいはれることを無上の名譽にして、日頃の蘊蓄をかたむけるといふ譯なのだ。

聞く人たちは、また知り合ひ同士のひるきくで、

「橋場の弟つさア、やつてくれ」

などと聲援する。そして、そのなかには、嬢衆もあれば、娘たちもある。そして、

「巧いもんだ。どこの若い衆だらう」

「あら、太次平さんこの三番弟さ」

などと、知つたものは自慢する。

一方には、また夜角力などもある。若い血氣な連中から、ともすると中年の爺つアざかりが、昔の腕をさすつて、我慢が出来なくつて飛び出して、

「オツシヤツ」ドシン。

と、今時の若いもの、やうに無茶でない。これでも昔人間は、角力の作法を知つてゐるといつたやうに、四股を踏んで見せたりする。

一年一度の春祭り。村人の年中唯一の歡樂といふ譯なので、いろんな企てがある。さうして時折り、三寸位の煙火があがる。田毎の月や、龍の玉遊びなどが打ち揚げ中の呼びものである。

お松はそんなことを思ひ浮べて、腰が自づと落ちつかぬ氣持ちである。が、薫が行かなければ彼の女も一人では行きたくない。それは村の若いものたちに嘲られる

のが厭である。怖くもある。

二

そのとき、薫はまた、お松と別な光景を思ひ浮べてゐた。

それは、さつき、晝間うちに、お宮へ、お松に誘はれて、二人で揃つてお詣りに行つたのであつたが、端なくも、男の厭はしさを知つた。いま、でもちよつと若い男どもに黴れて、厭なと思つたこともあるが、今日のやうに厭はしい耻かしい思ひをしたことはない。

彼の女にはその光景が再現されて、ゾツと寒けを覚えるのであつた。

* * * * *

「や、女神が天降つて來たぜ」

「素敵な別嬪だな、どこの代物だい」

「ウン、アレか。あれは君、俺ア村の王女さ」

「フム。なるほど。どこの娘だい」

といふのは、隣村あたりの若いものらしい。縞の羽織を着込んで、白い半ケチを首へ巻きつけてゐる。

「ヨ、ザキナス。すつとそんま」

そこへ來かゝつた一團の若いもの、一人が瓢輕に叫んで、ゲラ〜と笑ふと、ジロリと薫の顔を見て、パイと側を向くと、ヨウといつて、手を叩いた。

「戀しき薫のきみへ、エへ、」

一人の若者はヌツと摺れ違ひさまに、首をつき出して、薫の顔をマジ〜と見た

「オイ、どつちがい」

「きまつてゐらアな。鶴のおとし子さ」

「だが、松ツちやの方もいゝな」

「フン」

「薫ちやの方は上品だが、松ツちやの方は濃艶だぜ」

「なるほど、村夫子先生の批評だな」

「薫ちやは白菊の如く。松ツちやは姫百合の如しだ」

「ウフ、先生、ちつと間違つてゐねえか。濃艶で姫百合はおかしいぜ」

「フン、なるほど、まア、どつちでもいゝや」

「おあひにく、薫ちやも松ツちやも、見向きもしなかつたぜ」

「ア、情けないな。悲しや、口惜しや。薫ちやアツ、松ツちやアツ……」

村夫子先生といはれる若者、大聲で二人の名を呼ぶ。

薫とお松は、誰れだらうと思つて振りかへつて見ると、若者は、さすがにきまり

が悪くなつたか、他の若者のかげへ顔をかくした。

「萬歳ッ、ヨウーッ」



若者たちは手を叩いて笑つた。

二人のものは、ポツと顔を赤くして、逃げるやうに、手を引き合つて、人込みのなかへかくれた。

それから歸へり途であつた。村道の方へかゝると、もう一杯きこしめしたらしい若者たちの一團に出會つた。若者たちは、いきなり一連になつて、通せん棒をしたそのとき薫は、お松のかけへ立つた。どうかといふと、お松の方は氣が勝つてゐて人前が強いところがあつたのだ。

「通して頂戴」

お松はちよつと愛嬌笑ひをしていつた。

「いゝ女だなア、姐い」

若者はことさらに酔ふた振を見せて、グタ／＼とヨロける眞似をして、
「なア、オイ松木、こんな女を嫌アにしてくれないかなア……ハ、ハ、ハ、ッ」

と、巫山戯てゐる。

「通して頂戴」

お松は、も一度、少し聲を強くいつた。

「折角、網に入つた金魚を、たゞ逃がせねえやな」

と、外の若者がいふ。

「さうだとも、ヨウ」

と、若者たちは面白さうに笑ふと、ヨロ／＼と先に出た若者がお松の手を捉つた。

「アレツ。なにをするのツ」

ビュツとお松はその手を拂つて、スルリと袖の下を抜けると、後にゐた一人が、やにはに肩へつかまつた。

「厭だよう」

お松は突きのけて走つた。

「薫ちやア、早く／＼」

お松は招く。薫は、ウロ／＼後退りしてゐる間に、一人の若者に無手と抱きつかれた。

「アレツ」

薫は蒼くなつて逃げやうとした。が、若者は放さずに、陽に焦けた黒い頬の、酒にほてつてゐるのを、ペトリと、薫の頬に押し當てた。

「アツ」

薫はもう夢中に藻掻いて逃げ出した。

薫は、そのときのことを思ふと、いまでも、アノ生温い厭はしい黒い男の頬の汚れが、執念く焦げついてゐるかのやうに、不快な、氣持ち悪るさを感じるのであつた。

爺やは、チビリ〜とやりながら、二人のやうすを樂しやうに見てゐたが、やつぱり、生れで、薫の人柄は違ふわいと思つて、感心したやうな、また誇らしいやうな、頼母しいやうな氣がした。

「ウム。さうだ。年頃になると村の若いやつらがまた、黴つたりなんぞするからなア。お松も出ないでゐるよなア」

と、いつてゐるとき。煙花のあがる音がした。

「オヤ、花火よ、松アちや」

薫は横戸の側に立つと、もう、ちらと火花を見せただけで、消えてしまつた。お松もその肩へ掴かまつた。

「見えて？」

「見えるわ、爺ア、よく見えるよ」

薫が、ニッコリ笑つていふ。

「さうか、ドシ〜」

美しい娘に、お仲間へ呼ばれて、平助爺やは、イソ〜とやつて来る。

「爺ア。こゝで飲むといゝわ」

薫は敏くも爺やお膳を、端へ持寄せて來た。

「ハイ〜」

爺やは、妙に嬉しいやうな氣持ちで、言葉で丁寧にやつてゐる。

また、煙花の音がした。

三人の眼は、期せずして空を見た。

ドンと火花が散ると、ノロ〜と白い煙が二すじになつて、舞ひわかれる。そのなかに二つの星のやうなものが、ボカツと光つて流れる。白い煙が、その後を追ふ

やうなあんばいである。

「こらいいな」

爺やは譯もなく、たゞ時間の普通の煙花より永いのに感心してゐる。

「あれ、龍の玉遊びよ」

と、薫が説明した。

「フン、なるほど、ちげえねえ」

このとき、誰やら表の方へ來たらしい。

「平助どんるるかい」

と訪ふ聲がする。

爺やは、オヤツとして、

「ハイ、誰れだね」

といふとき、早くも客は無遠慮に上つて來た。

「ヤ、いゝお祭りだのう。ウン、爺ツつアんは幸福もんだ。こんないゝ娘さんたちを側に置いて。まア、ごめんなやう」

と、客はテクリと腰をおろすと、

「洋服は窮屈でいけねえ。爺ツつア、勘辨して貰うよ」

といつて、アグラをかく。

爺やは、ちと、ムカツとしたらしいが、なぜか、愛相笑ひをして、

「ア、こらまア、多賀谷さんでねえかね。えらう無沙汰をしました。こらや。杯を一ツ持つて來てくれ。へい、てうどいゝお祭り天氣になりました」

「まつたくだ。お祭りに雨にでもなられては、折角の待ちもうけもだいなしだ。香具師ども、大當りだ」

「まつたくでござんすて」

といつてる間に、こんどはお松が杯を持つて來た。そして薫は奥でお銚子を入れ

てゐた。

「まあ、親方一ツ」

と、爺さんは杯を差す。

「すまねえなア、爺ツつアん」

多賀谷は舌甜めづつて、グビリと飲むと、

「酒と遠慮は仇同志だ、姐ちやんから酌をして貰ひていな」

と、笑ひながら杯をつき出した。

「親方、こいつア、まだおぼこでねえ。お松ツ一ツついであげれや」

お松は、ちよつと羞恥かんだが、銚子をとつて、ピチヨ〜と酌をした。

「ウ、美味いや。こいつア、素敵だ」

ニヤリと多賀谷は笑つた。

暫くすると、多賀谷は、

「ときに爺ツつアん」といつた。

爺やは、なにか、ギツツとしたやうだが、

「へい」といふ。

「氣の毒だがなア、俺ア、急に金の入要が出来たんで、融通して置いたのをかへしてもれえめえか」

と、切り出した。

爺やは、ハイといつたが、ウンとつまつた。

「どうだらうなア。俺もこんな催促はしたくはねえんだが、急に借り先きから督促をされるので、背に腹はかへられねえといふ譯だが」

と、多賀谷は猫のやうに爺やの顔を覗き込んだ。

「ハイ……。そいつア困つた。俺も、今といはれては、苦面のつけやうもねえんでござんすが。親方なんか、もちと待つて貰ひますまいか」

「ところが、俺も困つてゐるんで」

といつて、多賀谷は、ポケットから敷島を一本抜きとつた。

「といはれても、どうにもしやうがないんですが。親方なんとか」

と、爺やはまだ酔も醒めて、縋るやうな顔をした。

「どうもさういはれては困るんだ。どうしても要り用が出来たんで」と、煙草を喫かした。

「ハイ」

爺やは悄然と俛首れて、どう言譯をしていゝかと考へ込んだ。

「それぢやア、どうだ。爺ツつア、こんなにいゝ娘さんがあるんだから、奉公に出さねえかね」

と、いはれたとき、爺やの眼は、ちらとお松に走つたが、すぐに膝に落ちた。

「二人なら、二百圓がものは、すぐになる。どうだい爺ツつア。物は相談だが、

さうしてくれねえかい」

「エ、二人ですつて。親方まア、そんなことをいはねえで、なんとか、もちと待つてお呉んなせい。お願いでござんすが」

「ところが困るんだ。どうしても金をこさへて貰はなくつちア、なア爺ツつア。金が出来なかつたら、二人の娘を奉公に出しねえ」

「そりや、あんまりだ。今が今といつて、そんなことをいはれたんぢやア」

「なにがあんまりだい。老爺、巫山戯たことをいふねえ。人から、二百圓といふ大金を借りてゐやがつて」

多賀谷が嚇つと出たので、爺やもムラ／＼と來た。

「なんだと、この野郎、年寄りだと思つて人を馬鹿にするな。まだ、手前たちにごまかされる俺ぢやねえだぞ」

「なにを、この老爺奴。金を返へしてから文句をいへ」

「ヘン、巫山戯やがつて、金を借りたつて、たゞ借りてゐねえだぞ。期限が来たら返してやらア。利息を拂つたら文句をいふな。來年の六月になつたら取りに來い」
爺やは、憤氣になつて捲くしたてた。

「オイ、老爺、人を盲目にするなよ。オイ俺ア、ちやんと知つてゐるぞ。お前俺んとこへ抵當に入れたこの家屋敷は、お前のものぢやアねえんだぞッ」

「だつて、そりやお前さん、その譯を知つてゐて、承知したんぢやねえか」

「オイ、馬鹿にしなさんな。誰れが、そんな幽霊擔保をとる氣違ひがあるものかい。まア、いゝや。いよくとなりや、出るところへ出るんだから。さうすりやお前、赤いお代着せもんだ。四五日中に来るから、ようく考げておきな。お前のためだ。ハイ御免よ」

多賀谷は、娘を生擒るには、喧嘩より、搦手の苦手がいと考へ直して、かうすなほに引きあげるるのである。

そのとき、そつと戸口からなかを覗いてゐたのは、前の猪之公である。
多賀谷が出て來るところを、いきなりガンと喰らしつけた。

「ア痛たッ」

「畜生ッ、女衒の惡漢めッ」

ポカ／＼と撲る。多賀谷は頭を抱へて、スタコラと逃げ去つた。

爺やは、グツタリと悄れ返つてゐた。その側にはお松が、憎えてゐた。奥の戸口には薰が顔を蔽ふてゐた。

猪之公は、外で、いつか悲しさを顔をして、悄然と覗いてゐたが、やがて立ち去つた。

三 美に憧憬るゝもの

信濃川の流に沿ふて、上流から下流の方へ、ポトリ／＼と歩るく一人の青年がある。

川沿の農家の垣根には、櫻の花が綻び初めて、鶯の啼く音も聞える。ポロ／＼の長股引に、鐵砲袖の半ちやを、藁縄で帯にした胡麻鹽頭を蓬々とした老爺が、鍬の柄に手をかけて、さも呑氣らしく、ブカリ／＼と唾へ煙草の煙を吹くのも、かうした田舎の情趣である。が、しかし、青年は失望らしく呟いた。

「日本一の大河といふが、この邊では、まると、繪にしたいやうなところもない。長岡を展望した風景なども氣が利かないし、それかといつて、こんなになんの奇もないタン／＼と流れる大河だけでもつまらないし」

と、獨呟ちて、あたりを、つまらなさうに見まはしてゐる。

青年は畫家らしい、左手には、カンバスを張つた枠を持ち、右の小脇には三脚を抱へ、肩に繪具箱をかけてゐる。

彼は、あちらこちらと見まはしながら、川下の方へ向つて下がるのであつた。精々で二間くらふと思はれる往還へ、運送馬車が時折通つた。そして、もつとも物珍らしく感じたのは馬車である。凸凹の道路を、型ばかりの幌馬車が、ガタリビシリ、いまにも組み骨がメリ／＼と毀れやしないかと思ふやうな音を立て、グワタ／＼と馬の足搔きとともにけた／＼と走る。なかの乗客は六人ばかり、馬車が、ギツンガタンと道の凸凹で、跳ね上つたり落ち込んだりする。そのたびに、幌馬車は危くヒツクリかへるかと思ふやうな揺れかたをする。

「ア、恐い」

若い娘は犇と父親らしいものに死噛みつく。

「コラヒドイ。まるで難破しかけた船にでも乗つてゐるやうだ」といつてる間に馬車は、また一ゆれ大揺れをした。道の窪へ落ち込んだのだ。ギツンと幌が揺れて、乗客は、アツといふと、ヨロ／＼とよるける。

「ア痛ッ」

なかで叫ぶ聲がする。幌の骨に、ゴツンと頭を打られたのだ。

「コイツア、やりきれん」

外の乗客は、氣の毒さうによそごとを呟く。

「畜生ッ、シツカリしろえ」

馬車ベツトウは、疝癩らしくビシヤリと鞭を喰らはせた。馬はバツと跳ぬると、ガラ／＼と挽き出した。

と、後から来たのは、乗合自働車である。ブー／＼／＼と警音を鳴らして来る。馬車はいつか追ひ迫られてしまったのだ。

「エ、畜生、来やがつた」

ベツトウは、チエツと舌打ちをしてギョロリと一目振りかへつて、普通にハイハイと馬に鞭を當てゝゐる。



「オイツ、馬車屋、シツカリやつてくれ。後がつかへてゐるぜツ」
自働車の運轉手は後から、さも邪魔ツケらしく皮肉にいつた。

「なにいつてゐやがるんない。走るツきりしか走しれねえや」
ベツトウ君、ベツと吐き出すやうにいふ。

「しやうがねえな。こんなガタ馬車なんぞ持ち出しやがつて」
運轉手君も、ムシヤクシヤ腹でやりかへす。

ベツトウ君、ムカ／＼として、グツリと手綱を繰りとめると、
「なんだと、畜生、ガタ馬車つてことがあるか」

運轉手も、前がつかへたので自働車をとめた。

「なにしてゐやがるんだ馬鹿野郎。グツ／＼いはんで、早くやれよツ」
と、運轉手君怒鳴つた。

「畜生、巫山戯やがつて」

ペットウ君、バラリと臺から飛び降りた。

「こら、慶さん、よさッせえよ。慶さん」

乗客の一人がとめる。

「え、い、畜生、癖になりまさア、生意氣なッ」

慶さん、夢中になつて自動車に飛び蒐つた。

「野郎、さア来いッ」

グイと、運轉手の手を引つ掴んだ。

「オイ、亂暴するな」

運轉手も憤氣になつて挑ねかへす。

そのとき空俵を挽いてきた一人の車夫、面白さうに、この喧嘩を見てゐたが、

「ウム、慶さん、シツカリやれ、そんな畜生生意氣だ。撲つてしまへ」

運轉手と慶さん、トウくと道路で取ッ組み合ひをはじめた。ところへ、例の車

夫君がいきなり飛び込んだ。ドシリと運轉手を蹶とばす。

「畜生、邪魔氣だい。態ア見ろッ」

二人掛りで、運轉手をサンくに叩きノメすと、

「面倒臭えや、泥のなかへ叩き込めッ」

バチャリと、片側の田圃のなかへ、突きおとした。

「ウッ」バチャくと、運轉手は青田のなかで藻掻いて、やつと這ひあがつたときには、馬車も車夫も、タツくと駆け去つてゐた。

二

「亂暴だなア」

ニカリと笑つた畫家らしい青年は、シートと喧嘩の相手同志の別れる後を眺めてゐた。

「やつぱり生の争闘だ、勞資問題の片鱗だ。つまり、アノ馬車屋と車夫が、自動車屋といふ、資力のあるものゝ力に壓倒されて、窮した弱者が、獸のやうに心を荒らふらせて、可憐な反噬を試みるのだ」

と、青年は考へるとも考へたが、

「アレも現代の社會相、人間の生活の姿の一つだ」

かういつたが、それも自分には、なんのかけはりもないことのやうに思はれた。自分の生活は安定されてゐる。自分は人生の享樂に生れたのだ。悶える人生は自分のことではない。自分は悠々と自然に親しみ、自然を讚美し、美のなかに、美の表現をすることだけでいいのだ。

彼は、ニツコリと笑ふと、もう、いまの出來事などは忘れたやうに、またあたりの氣色を眺めながら、ダン／＼と川下へ歩くのである。道は川筋を外れて、ウネツて來た。

青年は、ハタと立ちとまつて見ると、小徑を傳つて、向うてに水車小屋がある。

「ウム、水車小屋があるな」

ジツと見た青年はその水車小屋の方へ外れて小徑へ入つた。

二人の百姓風ていの男が、小屋から出て、往還の方へやつて來た。青年の方を見ると、迂散らしくその顔を見て、

「お前さま、こゝへ行つたつて、行きどまりで、路はねえぜね」と、親切におしへてくれるのである。

「ア、さうですか。……君アノ水車小屋はなんだね」と、青年は訊いた。

「アレかね。あれア、精米所でござんさア」

「ア、さうですか。イヤありがとう」

青年は、田舎ものは朴直でいゝ、などと思ひながら小屋のあたりへ行くと、その

あたりを、あちらこちらと歩るきまはつて見た。

彼はどの邊から、この水車小屋を畫面へ描寫したなら、この感じを表現するところが出來やうかと考へたのだが、結局もとの往還へ引きかへして、路上から描いて見やうと、彼は往還へ出ると、とある地點を撰んで、やがて三脚を据えつけた。

春の日は和やかに、青年の肩をそつと撫でるかのやうに、心地よいスキミを起す静かな田舎の感じは、彼の心を、統一した氣分に誘ふ。やがて、そこからは藝術が
出る。

彼はいろ／＼の繪具を板の上へナスリつけると、キャンパスに向つて、繪筆をナスリつけはじめた。

彼は、ふと、誰やら後に立つ氣配を感じて、フイと振りかへつた。

そこには愛らしい田舎娘が一人立つてゐた。

瞬間、彼はポーツと顔を赤くした。それはドウした意味かわからない。自分の繪

の拙づさを見られた恥かしさでもない。といつて、この娘に、なにか不純なものを感じてゐるのでは勿論ない。彼はたゞポーツとしたのだ。と、娘は、ちらと恥かしさうに齒を見せたが、これもなぜかホンノリ頬を染めて顔を伏せた。人のことを立見したことに恥らうのか、どうした意味か知れぬ。

青年はやつと氣をとりなほして、

「君、このあたりの人かね」

から訊いた。

「ハイ」

青年はジツと考へ込んだ。がやがて、

「どうだらう。君のうちまで、僕をつれて行つてもらへまいかね。僕、ちよつと話して見たいことがあるんだが。繪のことだね」

といふのである。

「ハイ」

と、娘は考へるやうであつたが、

「ようございますわ」

といつた。

青年の顔には、一種の輝きを現はした。彼の藝術的興味が、湧然とわき起つて來たのだ。

清い乙女。それこそはこの、なんの飾りけもない、なんの汚れにも染まぬ、野に咲く白百合のやうな、この娘の外に誰れがあらう。かう青年畫家は思つたのである。彼はこの好畫題を捉へて、秋のサロンに覇を争つて見たいと思つたのである。

三

青年は前島透、美術學校を出たのであるが。元來が富豪の嗣子、なにも、それに

よつて職を得るといつたやうな譯ではなく、たゞ天性繪が好きなが故に描くといふいはゞ道樂半分ともいへやう、が、その天分は、將來に矚目されるだけの素質があつた。

いま、平助爺やが家の茶の間といつたところで、四角バツて膝に手を置いてゐるのは前島である。話しといふのは外ではない。

「河原の葎が生きくと葉末の露に、旭を受けて輝く前に、世にも清い女性が、惠まれた自然のなかに、いかに人間の美しさを現はし得るか、現はし來るかを描いて見たい」

かういふ意味で、薫をモデルに貸して貰へまいかといふのであつた。

平助爺やは、ちよつと薫の自慢になる話合ひなので、心を動かされたが、また娘を道具かなどのやうに、貸しものにするのは嫌だといつて断はつたのである。が、青年はどうしても肯かない。どうしても描かしてくれと頼むのであつた。

「爺ア。俺れ、モデルになつてもいいわ」

と薫はいふ。彼の女はいろんな雑誌やなどで、いくらか藝術といったやうなことに、かすかに理解を持つてゐた。で、前島の熱心に動かされて、かういひ出たのである。

「フム。さうかな。イヤお前さへいゝといへば、なにも俺アが断はるほどのことでもねえんだが」

と、爺やもいつた。が、爺やの頭のなかにも、美しいものゝことに、繪のやうだといふこともあると思ふと、どうやら薫がその繪のやうに美しいのだとも思はれて誇らしくもあるのであつた。

前島は、飛びあがるやうに喜んだ。

「デハどうぞお願いします。朝の天氣の具合を見て、描くにいい日に來ますから」
前島は淡白にいつて、イツ〜と歸つていつた。薫は、なにか自分の人生のなか

へ新しい生活が現はれて來たかのやうに、明るい感じがするのであつた。

朝日がキラ〜すると、前島の姿は、ノッコリと、平助爺やの家の前に立つた。そして美しい娘は河原の葦へ導かれた。

村の若者たちの間には、いつか岡焼きらしい囁きがあつた。

「オイ、アノ晝描き野郎、薫におかしく思つてゐるやがるんぢやねえかな」

「ヌツペリボンヤリして、女ツ子に好かれさうな顔をしてけつかるからな」

「俺ア村の一番娘にウカ〜手をつけなんぞしやがつたら、畜生たゝんでしまへ」

「別におかしくもなささうだよ。朝の間、描くとすぐに歸つちもろといふことだ」

「だつてよ。遠くて近いもんだからな。若いやつと、若い女だ。猫の前の鯉節だからな」

「畜生、うまくやつてやがるな」

なんと、ジロ〜と眼を輝やかすやつもある。

葦の葉の幾枚かを胸に靡かせて、嫣然として立つた薫の姿。それは、なんにたとへていゝか、ちら〜と散つて地に落ちた花の精が、いまかりに、この葦の葉がくれに、幽かに姿を純な田舎娘にかりて、こゝに現はれたかと思ふばかりに、清かな乙女である。

前島はたゞもう、恍惚と酔ふた心地、夢のやうな藝術感興の陶酔のなかに、無心に、夢中に、たゞ対象の美に心を打ち込んで、一心に描きあげるのであつた。

畫面には、もう、生けるやうな薫の顔が嫣然と現はれてゐた。

前島は、いま葦の葉かくれの下半身に筆を運んでゐる。

そのとき、前島の後に、猪之公の姿が、さも憂鬱らしく立つたのであつた。そして、ジツと畫面を見つめてゐる。その前に、薫の方にジツと目を向けたので、なんとなう、變な氣持を感じた薫が、思はず氣色を變へたのには、前島は氣がつかぬのであつた。

と、猪之公は、なんと思つたのか、險惡に光つた眸を、ジツと前島の横顔へ、喰ひ入るやうに凝らしてゐたが、ブル〜と身をふるはせると、まるで發作的とでもいふやうに、

「畜生ッ」

と叫ぶと、前島の横顔を、ガーンと喰らはした。

「アッ」

ビックリした前島は、重心を失つて、ドタリと、三脚から轉がり落ちた。

見ると、そこには、巖丈らしい若者が、野良仕度のまゝ、口を尖らせて突つ立つてゐる。

前島は、打たれた頬を擦りながら、さすがにムカツとして怒鳴つた。

「なにをするんだッ」

といひながら立ちあがつた。

「なにッ、糞ッ」

猪之公は再び拳を振つて飛びかゝつた。

前島は愈々驚きながら、その手首をひつ掴むと、肩にかけて、ツドンと投げ落とすと、ギユツと襟首を掴んで捻ぢつけた。

「エ、畜生ッ」

猪之公は、眞つ赤になつて跳ねかへすと、遮二無二死噛みついて、捻ぢ伏せやうとする。二人はコロコロと轉がつて、ときたま拳が飛ぶ。

薫は、ビックリして駈け寄つて来た。

「ヤレ〜」

と、ウロ〜してゐるが、どうすることも出来ないで、もう涙ぐんでゐるのであつた。

するうちに、前島は、やつと猪之公を捻ぢ伏せた。

「なんといふ亂暴なやつだ。いつたい貴様どうしたといふんだ」

「ウーム、畜生、糞ッ、ウーム」

猪之公はまだ跳ねかへして反抗しやうとするのである。

前島は呆れながらも拳を固めて叩きつけやうとした。

「アレ、待つてくださいな前島さん。これ、うちのすぐ隣りの、兄んにやアでござんすのよ」

といふ。

「知つてゐるんですか。どうも、驚きましたね。唐突けに、僕の横面を喰はすんだもの」

と、前島も怪訝な思ひで、猪之公を見おろした。

「猪之さん、なぜお前、そんな亂暴をするの」

薫は優しく猪之公の顔を覗き込んでいつた。

猪之公は、シロリと薫の顔を見たが、急に力が抜けたやうに、グッタリと顔を伏せてしまった。

「イヤ、驚いたく。いつたいどうしたといふんだらう。オイ、無茶なことをやっちゃ困るよ」

「といひながら、前島は、もう猪之公の抵抗する意志を失つたことを知ると、やら猪之公の背を離れた。

猪之公は、いつまでも倒れたまゝである。

「ねえ、猪之さん、どうしたの。どこか痛い」

薫が訊くと、猪之公は首を振った。

前島は、思はぬ災難に出會して、その日はそれきりに、三脚を畳み、繪具箱を擔いで、

「馬鹿／＼しい目にあつたものだ。今日はもうやめにしやう。薫ちゃん。歸らう」

欠



欠



しく型ばかりの荷づくりをした。持ちものとしては、着換の一包み、身のまはり少しくらゐるのものであつた。が、慌たゞしい旅立ちに、お松も、いまは、なにやかと、薫の手傳ひをして、やがて、ともかくも仕度も出来た。

「薫ちや、髪を結つてあげやう……」

と、お松は、薫の髪を見ていつた。

「さうね。松アちや、デハねえ」

薫は、ソツと髪を抑えて見てニツコリと笑つた。彼の女は、押入れから、髪箱を出すと、安物のたてかけ鏡を、窓の闔きはへ立てると、ちよつと、顔のやうすを見て、微かに笑つて、小さな鏡みを取りあげて、元結ひを切らうとした。

「ア、俺が解いてやるわ」

「ありがとねえ」

お松は薫から鏡をとつて、元結ひをブツ／＼と切つて、ツヤ／＼とその長い髪を

バラ／＼に解きほぐした。

「薫ちや……これでもう、薫ちやの髪を結つてあげるのも、おしまひねえ」といつたお松の聲は淋しく聞える。

薫は、ちよつと涙ぐましい氣持ちになつて、

「松アちや、もう、そんなことをいつては厭、俺、泣きたくなつてしまふもの」

「ほ、ほ、薫ちや、俺、悪るかつたね。もういはないわ……」

と、お松も涙ぐんだ。

「でもねえ、松アちや。俺、來られるやうなら、直きにまた會ひに來るわ……」

「ほんとよ、ほんとよ、薫ちや、キツトだよ……」

「ア、ほんとよ」

「オ、……ねえ、薫ちや、ほんとよ、俺、どんなにか待つてゐるわ」

二人の娘は、永年の間、喧嘩一つせずに、双生兒といつても、まるで、二人が一

つかのやうに、仲よく暮して來たのに、いま別れなければならぬと思ふと、獨りで涙を誘はれて來るのであつた。

お松は懐かしい一杯の氣色で、スキ櫛を入れて、やがて練り油を、掌にコト／＼と擦り解くと、しきりと、髪を撫で、油を摺り込み、そしてツゲの櫛で、スキかへすと、白い元結ひをとつて口に啞へ、髪をいくつにか分けて、やがて器用な手振りで結ひあげた。ツヤ／＼と黒い髪は、フツクリと前髪や鬢のフクラミを見せて、優しい薫の顔にシツクリと、愛らしい面を鏡面へ映しだした。

薫はニツコリと笑つた。小さい後鏡を後ろへかざして、後髪を寫して見てまたニツコリ。

「松アちや、ありがとうよ」

嫣然と微笑む。お松は前へまはつて、シツとその顔を見て、嬉しさうに笑つた。

爺やは、このやうすを見ながら、なにか獨りで悄然としたやうすであるが、さす

かに、美しい二人の心を見ると、嬉しうに立つて見て、
「ア、いゝくよく出来た〜」

と、笑つた。

「爺ア、似合つて」

「ア、似合よ〜」

「さう。では松アちや。お前の髪も結はしてねえ」

「ア、さうね。結つて頂戴ッ」

お松は嬉しうに、鏡面に向つて座つた。薫は、こんどお松にかはつてお松の髪を結ひかゝつた。

「松アちや、どんなに結ぶの」

「薫ちやとおなじに、銀杏がへしに……」

「さう……」

やがて、薫は、一心に結ひあげた。

お松は、髪を寫して見てニツコリと笑つた。

薫は、その肩に拵つて、ニツコリと微笑んだ。一つの鏡面に、二つの美しい少女の顔が笑つて現はれるのである。

このとき、平助爺やは、窃つと後に立つて、鏡のなかを覗き込んだ。

「アラ」

二人の娘は振りかへつた。鏡面には爺やの顔が、二人の上に現はれたのである。

「爺ア」

と、二人の娘は嫣然と笑つた。爺やは嬉しうに、ニツコリと笑つた。が、その眼には露を含んでゐた。

「爺さん……」

元氣よく入つて来たのは、前島である。

「ア、前島さんだ」

爺やは、ポト／＼と走り出た。

「仕度は出来たかね」

「ハイ／＼、出来ました……薫、お松……前島さんがこらしたよ」

二人の娘は、結びたての髪に、男の前へ出ることを羞らうやうに、二人は肩に手をかけながら出て来た。

前島と薫は、相見てもニッコリとした。

「まだ、そんなに急かなくてたつていゝんだがね。どうかと思つて……」

「ハア、まだ、夜行で行くには早いから、まア、ゆつくりでさア。なにはなうても

薫の立ち振舞に、さつき鯛を買ひましたで。お松、一つこさへてくれや」

「アイ」

お松と共に、薫も勝手へおりて、二人でなにやら夕飯のしたくをはじめた。

爺やは、なにくれとなく、前島に、薫のことを頼んでゐた。そして、前島詮三さんなら、御主人のところにゐたときに、かつて知つてゐるといつた。

前島は、薫が、どういふ人の子であるか？などと、獨り考へてゐたが、とにかく薫のことについては、身を以て引き受けたといつた。

そのうちに、二人の娘の手になつた料理が運ばれて、お銚子も入つた。四人は、暫くの名残りといつて、一緒になつて、薫もお松も杯を一口づゝ啜らされた。前島も、その日は親類扱ひに、晚餐を饗されたのであつた。そして、それは、前島には、この上もなく嬉しいものであつた。

やがて時刻も迫つた。爺やは、藏王まで舟で送るといつて仕度にとりかゝつた。

勿論お松も一緒にである。留守居には市兵衛どんの嬢アである。

近所の誰れかが、このことを聞き知つて顔出しに來た。

「まア、平助どん。薫ちやが、行きなざるつてね。俺ア、一向知らなかつたが」と、嬢アどんたちがいふ。

「ハア、急に行くやうになつたで」

「どうせ、田舎に置くには惜しいつていつていたんだが。そうかく……薫ちや、身體を大事にしてね……」

「ハイ、ありがとうございます。どうぞ、爺アのことお頼み申します……」

「ア、く、心配しやつしやるな。みんなお互ひさままで、宅のことなんか思はないで、よくなつて來なせえや……」

「ハイ」

薫が、挨拶して出ると、近所の人達も、みな、渡場口まで見送つてくれるのであ

つた。

四人を乗せた舟は、爺やの竿で岸から離れた。村の人達は、村の自慢の娘を去らせることの、人ごとながら淋しいやうに、薫に別れの言葉を送るのであつた。

舟は、ゆつくりくと、信濃川を横ぎつて進んだ。

やがて、藏王へつくと、そこで、前島と薫は、人力車をやとつて乗り込むのであつた。

そのとき、ヌツと渡場へ現はれたのは、女衞の多賀谷であつた。

爺やは、ハツとしたやうに立ち縮んだ。

多賀谷はジツと腕車の後を不審相に見送つてゐたが、

「や、平助どん。これからお前のところへ寄らうと思つてゐるとこだつた。てうどい、一緒に乗せていつて貰はうか」

と、渡し錢はロハと獨りぎめして、爺やの舟へ乗り入つた。

多賀谷は、爺やよりさきに立つて、人の家にも遠慮もなく、ツカ〜と上つて、ドカリと腰をおろすと、ポケットから巻煙草を抜きとつて、プカリ〜と喫かしながら、キヨロ〜とあたりを見まはしてゐるが、どうやら、家のやうすがちがうと思ふと、すぐと、いまの藏王で俥に乗り込んだ女のことには氣づいた。

「畜生、玉をかくしやがつたな」と呟いた。

そのとき、爺やは雑巾で足を拭つて、端折つた尻をおろすと、手拭でバタ〜と叩いて、やがて座についた。

多賀谷は、ちと、中ッ腹になつて、側へ向いて知らぬ振りをしてゐる。

爺やもこの間のことがあるから、いゝ氣持ちでないから、これも黙つて、煙草を

一喫吸ひつけた。

そのとき、多賀谷は、ジロリと爺やの顔を見ていつた。

「平助どん、いま藏王で俥に乗り込んでいつた女は、ありや誰れでえ」

爺やは、ちよつとギクリとしたが、別に疚しい譯でもない。が、因縁らしく訊かれると腹が立つ。爺やは黙つてゐる。

「オイ、薫を手前え、どうかしたなッ」

多賀谷は、愈よ怪しいと睨んで嚇つとなつていつた。

爺やも、グツと癪にさはつた。

「お前さんはまた、妙なことをいはつしやるな。薫をどうしやうと、お前さんのかはつたこつちやねえ」

「なんだと、オイ、老爺、お前はキツト、アノ薫を、どこかの人入れ稼業のやつに賣つたんだらう。どうだ、俺れの睨んだ眼に違えはあるめえ。オイ、金をかへして

もらわう」

と、多賀谷は氣色ばんでいつた。

爺やも、金のことを切り出されると、いくら、齒を喰ひ絞るほどに思つても弱味である。

「すみませんが多賀谷さん、どうかまア金のこととは證文通り、來年の六月まで」といひかけると、

「エ、やかましいや。だからこの間あんなにいつてるぢやないか。金が出来なかつたら、二人の娘を奉公に出せと。それなのに、手前ア、アノ薫をどこかへ奉公に出しやがつて、金をたんかり懐へ捻ぢ込みやがつて、待てとはなんだ。さア返せ。二百圓、耳を揃へて返せッ」

「お前さん、いくら返せといはしたとて、無いものにはしかたがねえ……まアそういはねえで、待つてくんせえ」

「しらばツくれるな。金を返へせ」

「金があるくれえなら、なんでこんなことをいはう。多賀谷さんたのむ」

「それぢや、薫はどうしたのだ」

「あれは、さる縁故で、育てゝもらうことにしたんでござんす」

「フーム……育て……おかしいな」

と、多賀谷は首を捻つたが、

「しやうがねえや。それぢや爺つつア、金はねえんだな」

「どうかまア一ツ……」

と、爺やは、頼むのである。

「よし、それぢや、爺つつア、お松の方を是が非でもつれて行く、一人ばつちぢやわりにあはねえが、まア、我慢をしてやる」

「そりや多賀谷さん、あんまりだ。薫が行つたらお松一人。どうかさういはねえで」

「エ、ソウくだらねえことをいはつしやるな、一人で淋しかつたら、なぜ薫をやつたんだ。金もこさえず、無茶なこといふねえ。お松はつれて行くから、さう思ひねえ」

「どうかまア、そういはずに……」

「やかましいや」

多賀谷は、いきなりお松の手をとる。顔えて隅にゐたお松は、アレツと叫んだ。爺やは、慌て、多賀谷を突き退けた。

「なにするんだッ」

「なにも糞もあるか。こうなりや意地だ、ヤイ老爺、お松を渡すか。それとも手前え、空屋敷を抵當に入れた詐欺の訴へをして、くらひ込ませてやらうか、老爺、どうだッ」

爺やは、ウンと俛首れた。

「さア、お松をよこしてしまへ。なアお松、手前も、老爺を監獄へやりたいこともねえだらう。さア來ねえ」

多賀谷はお松の手を引きつづた。お松はペタリと座つて、疊に泣き伏した。このとき爺やは、物をもいはず、側にあつた鎌をとりあげると、

「畜生ッ」

と叫んで、狂氣したやうに多賀谷に飛びかゝつた。が、お松は泣き叫びをたてながら、爺やを抱きとめた。

七 浮世の風

一

爺やがここでは、恐ろしい葛藤の起つてゐるとき、薫は前島と共に、上野行の三等列車のなかに、夢見るやうな心地でゐた。さうして、そこには、お上りさんの田

舎の人達が、商人やら、洋服の人やら、バスケットを抱へた女中風態の女や、都見物がてらの初孫の顔を見に行くのだなどとハシヤイであるお老婆さんだの、いろいろの人達がゐた。それらの人達は、上品な感じのする青年の繪枠を窓側に立てかけて、美しい田舎娘と親しげに喃々と話し合つてゐるのを見ると、怪訝さうにジロリジロリと二人のやうすを偷み見た。

長岡發の夜行は、二時間ばかりして、柏崎へ着いた。ギツリと汽車がとまると、一しきりドヤ〜と降昇の客が入れかはずた。

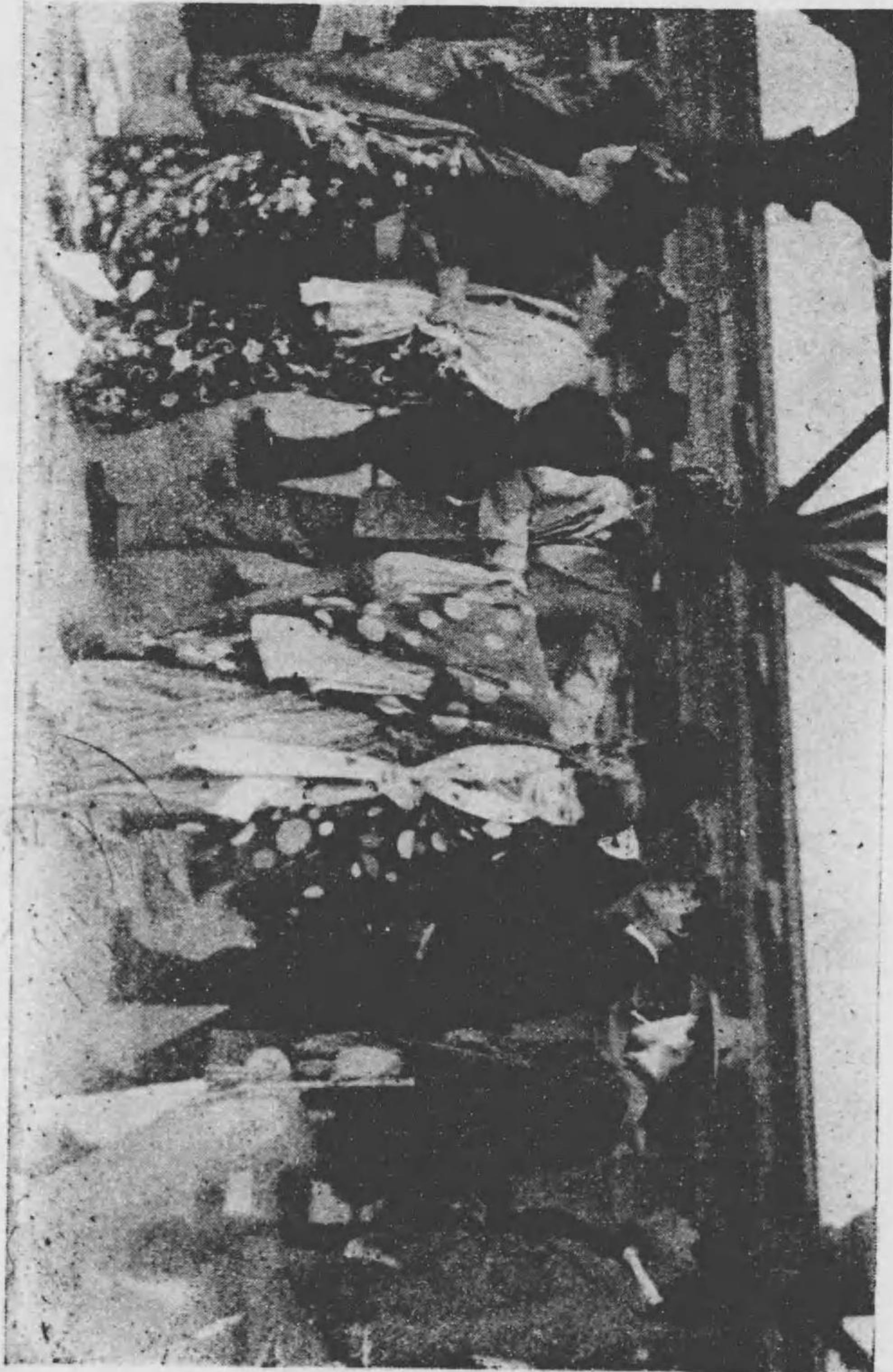
「柏ア崎……」

と、驛名を呼ぶ驛夫の聲が、まだるツコく眠むさうに過ぎると、

「エ、すしに辨當……ビールに正宗……明治饅頭……」

などと、調子のついた元氣な聲が流れる。

「オイ、正宗ッ」



「ヘイツ」

「オツ、鯨くれツ」

元氣な、大工らしい腹掛男が、ドンブリをさぐつて、ガマ口から、デヤラクと
お金を掴み出すと、

「オイ来た」

と、賣子の手の掌へ掴ませる。

薫は、うつとりと、物珍らしさうに、停車場の雑鬧した光景を眺めてゐた。静かな性質な彼の女にも、やはり、かうした喧騒のなかに、なにかしら、人の世の賑は
いだ、現實の活動といふやうなものに對する、心の躍る氣分を感ずるのであつた。

「薫ちやん。この邊なら、よく来たの」

と、窓に倚つて、外面を見てゐる薫と、顔を並べるやうに突き出して、笑ひなが
らつた。

「イ、エ、わたし、はじめてなの」

薫は、あまりに自分の世間知らずなことを耻ぢるかのやうに、少し、頬を赤らめた。

「さう。僕は、これで二度目なんだがね」

と、いひかけたとき、呼賣りが、四角い平たい箱に、紙袋入りのものを積んで通つた。

「オイ、明治饅頭をくれ」

と、前島はいつて買ひとると、また、夏櫛柑やらなにやら買った。

「薫ちゃん。明治饅頭なら知つてゐるだらう」

と、前島は笑つた。

「エ、お土産に貰つたことがありますわ」

薫もニツコリ笑つた。

「名物つて、案外つまらないものだが、こゝの明治饅頭は、いゝ方だよ」

と、袋を裂いて、薫に、お上りといつた。それから、夏櫛柑を剥いて、半分づゝ分けたりなぞした。

薫は、このとき、いつか家のことを思ひ出してゐた。爺アとお松が、急に淋しくなつた家のなかに、どんなにしてゐるだらう。と思ふと、懐かしい心に迫られる

「イエ、放せ、放してくれ。畜生、悪漢め、人をだまくらかしやがつて、アノ證文を書くとき、ウヌアなんといひやがつた。證文なんざア、ホンの形式だ。こうして取つて置けば、金の融通に都合のいゝことがある。ナアに、俺ア、お前のたしかな人間だつてことは知つてゐるんだ。心配はいらねえ。期限が來たら返へしてくれさへすりやいゝんだ。かう手前、吐かしたでねえか。こゝの屋敷や家を、借金のかたに渡さなきゃならねえつてことは、俺ア正直に手前に話して置いたぢやねえか。それ

を、手前が、構はねえ、證文の形さへありやいゝんだといつて、俺アに書かせたんぢやアないか。ウヌア、俺アをだまくらかしやがつたんだ」

爺やお松に抱きとめられながら、口惜しさに、齒をギリ／＼させて、いざといへば一撃ちに、頭のテツ頂に、鎌を打ち込んでやらうといきりたてた。

「爺アや、そんな、そんな、もしかのことがあつたら、大變ぢやアないか、のう爺ア……」

と、喘ぎながらお松は、泣き顔えになつて、一生懸命になつて、爺やを抱きとめるのであつた。

爺やに襟首を抑えつけられて、頭の上から、トゲ／＼と閃めく鎌の光りを浴せられて、蒼くなつた多賀谷は、それでもまだ口を利いた。

「お、老爺、手前え、俺を殺すといふんだな。ヘン、老人の癖に、往生氣のねえやつだ、殺されるものなら殺して見る」

お松が、抱きとめてゐると知つてゐるから、多賀谷は、ブル／＼してゐながらもかう、口だけは強くいふ。

「ウヌ、殺るさないでか。悪黨め」

ノボセあがつた爺やは、もう、年寄の一酷に、憎くてたまらぬやうに、バリ／＼と齒の音を立てると、

「畜生ツ、ウム」

ドタ／＼と足を踏んで身悶えした。

「アレイ、誰れか、誰れか来てツ」

死に身に爺やに死噛みついたお松は、悲鳴をあげて、助けをもとめた。

「ッ、ッ」

多賀谷も、ビックリして、ビタリと爺やの足に死噛みつくくと、頭を跨ぐらの間へかくすやうにした。

爺やは、バタ／＼と身ぶるひをしたと思ふと、お松が、アツと、怪た／＼ましく叫んだ。とたんに、鎌はサツと振りおろされた。が、多賀谷が、自分のからだにへばりついてゐるので、爺やも、勢ひ込んだ鎌も、中途でスツと力が逃げたので、狙ひどころは外れて、洋服の袖をカスつて、脇の下へ流れた。

「エ、畜生ッ」

爺やが慌て、手をかへさうとするとき、多賀谷は夢中にその手に縋りついた。

「ウ、畜生ッ」

「糞ッ」

爺やと多賀谷は、鎌を中心に挑みあつた。

お松は振り飛ばされて、ベタリと座つて、もう聲も出なかつた。憎えた眼を見張つて、ウロ／＼するばかりだつた。

そのとき、近所の誰れかが、お松の悲鳴を聞きつけて飛び込んで来た。

「ア、大變だッ」

四十餘りの、四角い顔の男が、バラ／＼と駆けあがると、やにはに、多賀谷に乗りかゝつてゐる爺やを抱きとめた。

「こら、こら、平助どん。まア、なんてこんだ。こら、危ねえ／＼。やめやつしやえ／＼、なんてこんだ」

と、引き放さうとする。

「畜生、悪黨め、ほんとにッ」

爺やは、ゼイ／＼息を切らせてゐる。

後から躍り込んだ村の人達が、爺やの手から鎌を揉ぎとると、多賀谷を外へ連れ出して行つた。

お松は、このとき、いまさらのやうに泣き出した。

「まア、平助どん、どうしたつてんだ、危ねえに、双物なんぞ持つて」

爺やは、一語もなく、グタ／＼と腰を潰して、グツタリと俛首れた。

イヤ、皆さん、すまねえ／＼」

ホロ／＼と涙をこぼした。

「まあ、怪我がなうてよかつたが、ほんとに、刃物なんて、險呑だぜツ」

やつとまアをさまつたので、みんなはホツとしたが、やうすがわからぬので、吐息を突きながら村人は、呆れた顔を見合せてゐる。

「松ツちや、もう心配しやつしやるな。ビックリしたらう。可哀さうに」

お松は漸く涙を拭つて、

「みなさん、すみません」

といつた。彼の女はこのとき、薫のことが、轟々と胸に描かれるのであつた。

二

發車の汽笛が、ピー／＼と鳴つた。

汽車は、ゆるやかに動きはじめた。やがて、タツ／＼と走り出した。

二十分くらゐで、ボンヤリとした夜の海へかゝつた。星月の夜に、海は、やゝ蒼味を感じさせて、渚を打つ波が白い泡を浮き出している。そして、海の中には、ところ／＼に岩石が現はれてゐた。いかにも、ゆつたりとした、自然の景色があるやうに思はれた。

「薫ちやん。御覽。いゝ景色ぢやないか。晝の汽車なら、この景色をハツキリと見ることが出来るのだが、惜しいことだ……ウム、鯨波とかいつたつけ。なんでも、この邊では一番の海水浴場だつてことだ……どの邊だつたけな。線路に沿つて、高い丘の上に、蒼海ホテルといふのがあつたが。いつか、避暑に来て見やうかと僕は思つてゐる」

など、前島は薫を退屈と旅の淋しさからすくはうとするかのやうに、なにか話

題をこさへて話すのであつた。

ソロ／＼車内には、眠氣の魔が襲つて來た。さつきまで、顔を反方向けて、口もきかずにあるた若い娘が、いつかその隣りの若い男の膝に両手をかけて、正態もなく眠つてゐた。架け枕に反りかゝつて、中年男が、口を開け放して眠つてゐるのもある。向うの隅には、丸つこい顔の四十男が、面白さうに、みな御愛嬌に浮世話して笑はせてゐるのもあつた。

「運の神さまつてやつは、額ぎはのところちよつびり毛を生やして、後ろはテカテカのツル／＼頭、まるで、河童の老爺といつたやうなやつだね。ところで、こいつは、素敏しいいたづらもので、ウカ／＼してゐるととんだめにあはされる。なんでもこいつは、ドカンと突き當つたら、出たとこ勝負に、チョツピリ前髪をひつ掴んで捻ぢ倒すんだ。それでねえと、スルリと反れたら、もう、トマルトスベル式の頭なので、つかまへどころがない。俺ア村の話しだがね。維新の始めだつたがね

幕府の兵隊が、官軍に追ひつめられてね、村の陣を引きあげるときだつたね。日雇ぐらしの一人もの、爺いだつたがね。それが、薄ぐらがり畑の芋堀りに出掛けたんだ。すると、どうだ、變テコレンナ一寸法師が、ちよろ／＼と走つて來て、ドンと老爺の腰へ打突かつたんだ。

「オヤツ」

老爺はビックリ。擔ひた鍬を抛り投げて、ヤツと一寸法師の頭を両手で抑えるとツルリとスベルと、キーと叫んで逃げやうとするんだ。とたんに、サラリと老爺は手に觸れた髪の毛を掴んでしまつたんだ。

「畜生、化ものめ、狐か狸か尻尾を出せ」

老爺は、ウンとピンタを喰はしたんだ。

「あやまつた／＼、爺さん、寶物をあげるから勘辨してくれ」
かういふんだ。

「ほんとか？」

老爺は半信半疑でついてゆくと、一軒の空家へ老爺を引つ張り込んだんだ。老爺は、怪態らしくビク／＼もので入いつて行くと、ザクリとなにやら踏みつけたんでビクリとすると、一寸法師は、スルリと脱けて逃げ出したんだ。老爺はそれにも氣づかずに、踏つけたものをさぐつて見ると、袋だね、

「オヤツ」

と、老爺が引きづつて見ると、ツツシリと重いんだ。

「ハテナ」

袋の口をあけて、手を入れて、なかの品物を攫んで見ると、ヒヤリとして妙な氣がしたんだね、ビク／＼引き出して握つた手を開いて見ると、薄ぐらかりにピカリと光る黄金だね。老爺は夢のやうに、夢中に擔ぎ出すと、家のなかの縁の下へかくしたんだ。

「薫ちやん……」

不意と前島は呼びかけた。それはもう、上野近くの田端の邊へ來かゝつたときだつた。

「ハイ」

どうです。それが金ガマスでね、大判小判で二千兩。今では立派な金持で、十萬圓はたしかだね。人間の運つてやつはわからねえもんだ」

一席辯じると、男は、アアと欠伸をした。やがて、コクリ／＼とその方でも舟を漕ぎはじめた。前島と薫は、嘘のやうで、ほんとのやうで、ほんとのやうで嘘のやうな話に、ニツコリと笑顔を見合せた。が、やがて二人にも眠けが襲つて來た。いつか薫は前島の膝の上へ突つ伏して寝入つてしまつた。

と薫が顔を上げると、前島は無邪気な笑ひを浮べたが、なにやら、用箋にサラサラと万年筆を走らせて、

「ねえ、上野へ着くと、ことによると邸のものたちが、迎ひに来てゐるかも知れないんでね。もしか、君をつれて来たことが知られると、僕、きまりが悪るいから……これ、こゝに書いてあるね、この、根津八重垣町の、葛家といふ口入家ですよ。これは、僕の家、いつも女中やなにかを入れる家なので、僕よく知つてゐるんだから……アソコの妻君は、もと僕の家、奉公したことがあるんでね、だから心配はないんだ。俵で、アソコへ行つて来てくれたまへ。僕は邸から、すぐと電話で置いて置くから……」

と、その走り書きを渡した。

薫は、ちらと不安らしい氣色を見せたが、それは直ぐと消えた。が、やはり覺つかなさうな氣色が見えた。

「心配しなくともいいんだよ。僕、あとで、すぐ行くんだからね」

薫は、やつと得心がいつたやうに微笑んでうなづいた。

汽車は上野へ着いた。夥しい人の群が渦を巻いてゐた。その目まぐるしい人の中に、前島は、書生福井の、クル〜とした顔と、妹の辰代が、白いシヨールを肩に垂れて人待ち顔に立つてゐるのを見た。

「ア、福井と辰代が来てゐた。薫ちゃん、彼の人たちにさとられぬやうにね……」
かういつて前島は、

「オイ、福井」

と呼んだ。

「アツ。透さんだ」

福井は、バタ〜と鐵砲玉のやうに飛んで来た。

「ア、お歸りですか。お迎ひに來ました」

「や、御苦勞だつたね。ナニ、荷物もなにもないよ。ホレ、この鞆と、繪の道具だ
けだ」

福井は、車窓からさし出す前島の荷物を受けとつて抱へるとき、辰代もハタ
と来た。

「お兄さん、お歸り遊ばせ」

「ア、辰代さんも来てくれたね。僕電報を見て、ビックリして歸つて来たんだが
お母アさんのやうすは？」

と、前島は心配さうにいつた。

「エ、急にお熱が出たもんですから、ビックリしましたわ。デモ、大したことは
ないつて、喜多さんは仰有つてよ」

「さうか……それならまあいゝが。僕、どんなかと思つたよ」

前島は車室の出口のあたりで、ニツコリと、薫に眼をやつたが、それなりに出て

行つた。

薫は、さすがに羞かしい心で、人蔭にかくれるやうにしてゐたが、辰代といはれ
るお嬢さんを、ちらりくと偷み見た。美しい、雑誌の口繪にある人のやうだと思
つた。それは、辰代の緞縹やなにかで思つたのではなく、たゞもう、そのケバ
しい扮装と、洗練された都の人の姿に心を打たれたのである。

辰代にも福井にも、薫には注意は向かなかつた。見窄らしいこの田舎娘が、前島
の同伴者であるなどは氣のつく筈もない。

薫は前島たちから、少し離れて、開札口から出た。

前島たちは、自働車を呼んで乗り入つた。前島はいくらか心配さうに、薫の姿を
求めて、振りかへつたが、二人の眼が會ふと、ニツコリとしてなかへ入つた。自働
車は、心地よさうに滑べり去つた。

薫は、自働車が行き過ぎると、急に淋しい氣持になつて、ウロ／＼とあたりを見

まはしたが、やがて大事な、前島から渡された行先の手紙を、も一度懐を覗ひて、たしかめると、少し落ち付いたやうにニッコリして、俵夫さんを頼もうと思つて歩るきかけたが、氣弱なので、言葉を掛けるに迷ふらしく、構内の柱に、ちよつと寄りかゝつて考へるやうなやうすであつた。

四

紡績のかすりの羽織、安もの、シヨールを掛け、小さいバスケットを提げた薫が、ちと悄然としたやうすであるとき、やはり、田舎娘らしい、ちよつと派出な、髪をハイカラにした女が、なにやらウロ／＼として落ちつかぬやうすである。薫は、見るともなしにその女の方へ目をやつてゐたとき、鳥打帽に、洋服姿の、髻をモジャモジャにした、いかにも迂散くさい男が、これもウロ／＼とあたりを、蚤とり眼といつたやうな眸光で、キヨロ／＼とあたりを見まはしてゐたが、この二人の田舎娘

を見ると、ジツと腕を拱んだ。

「年は十八、色白く、ステキな美人、昨宵の夜行で來るといふんだが」

かう呟いて、二人を見くらべたが、どうやら、ハイカラ娘の方へ鑑定がきまつたらしい。ツカ／＼と、その娘の方へ近寄つて行つた。娘は、ハツとして、バタ／＼と後退りした。男は、テツキリこれだと思つたらしい、やにはに、オイッ、とその手をとらへた。

「アレ、なにをするんです」

「手前え、越後の長岡から來たのだらう」

かういつて、睨んだ。

薫は、オヤツと思つた。

「イ、エ、違ひます。あたし、長野から來たのよ」

「嘘だツ、お前は、椎谷薫といふんだらう」

「違ひます。違ひます。あたし、棚橋千代ですわ」
「フウ、ハテナ」

男は、ちよつと小首を斜げたが、も一人の田舎娘を思ひつけたらしく、ジロく
と振向いた。そのとき、薫は、椎谷薫と自分の名を口にされたので、ゾツと氣味悪
るくなつて、思はず、ジロく柱の蔭へ身を潜めた。

男の眼は、ギョロリと光つて、その不審なそぶりに、氣づいたらしい。
「アツ、あいつだな」

ど呟くと、ポイと前の娘を突き放して、バラくくと薫のそばへかけ寄つた。
「オイ、お前だな、椎谷薫つて、長岡から来たのは」

と、薫の手をとるといつた。

薫は、たゞ恐さに、なんと答へるすべもなく、顔を背向けて、捉られた手を振り
切らうと藻掻いた。

「ウン、ヨシ、この娘だ。なるほど、こいつアいゝ緻繚だ」

と、ブイと客待の車夫の方へ向くと、

「オイッ、車夫、車夫ッ」

と呼んだ。

「オッ」

車夫は、ちよつとやうすが怪かしいといつたやうに、眼を輝かして、法被の袖に
腕を拱み合せながら、ジロくと二人のやうすを覗き込んだ。

「オイッ。この娘は、田舎から女給に抱へたんだが、途中でヅラかつてしまつたや
つを、運よく見つけたんだ。神田神保町の欣々亭。なア、知つてゐるか。アソコ
へ連れて行くんだ」

と、男は、よいから加減のことをいふ。

「ア、欣々亭。よく新聞に廣告がある。へい、承知しました」

「ウム、逃がさぬやうにな」

男はズル／＼と引つ張つて行かうとする。

「アレツ、助けて」

薫は、突然と、車ぎはへ來ると、必死に叫んだ。

「エ、圖太いやつだ。静かにしろ、人聞きのわるい」

男は、活と眼を剝いた。

薫は、憎えて縮んだ。男は無理矢理に薫を車に乗せやうとする。

「アレ、厭ですく」

薫は繊弱な身を、力一杯に藻掻いた。

「エ、剛情なやつだな」

男は鋭い聲音を掛けて、押し込もうとしたとき、

「オイッ」

と、男の後から呼びとめたものがある、

てうどこのとき、薫の郷里では、平助爺やが、殺人未遂者として拘引される時
 * * * * *
 であつた。

八 焼野の雉子

一

呼びとめられて男は嚇つとなつた。

「なんだね」

クルリと、薫を捉へたまゝで振り向いた男は、見ると立派な風彩の紳士である。
 で、いくらかドギリとしたらしくできるだけ穩かにいつた。

「どうしたのだ、若い娘に亂暴を加へてはいけないではないか」

と、落ついた口調でいふのである。

「餘計なことですよ。エ、剛情な女だ。サツサと乗りやがらねえと、承知しねえぞ」
男は紳士に對する反感を、薫の方へ持つていつた。

「厭です、助けてッ」

薫は、泣き出してしまつた。

と、紳士は、少し氣色を變へた。

「こらッ」

鋭く叫ぶと、やにはに男の肩先きに手をかけると、グイと引き放さうとした。

「なにをしやがるんだッ」

男は、サツと顔色を變へると、ヨロ／＼とよろけながら、パツと、後さまに紳士の足を蹴つけた。

「おのれ、失敬なッ」



紳士の毗が、サツと切れ上ると、素早く紳士の身體が動いた瞬間に、男は、ド
タリと横倒しに投げ出された。

男はコロリと轉がると、バツと跳ね起きたが、

「畜生、巫山戯るなッ」

と叫ぶと猛然と拳を振つて打つて蒐つた。

紳士はスツと首を斜げて肩を打たせたが、その手を素早く左手で抑へると、右手
でバツと男の咽喉を抑へつけてしまつた。

「ウ、ツ、ウツ、は、放せッ」

男はバタ／＼と手を振つて藻掻いた。

「ヤ、喧嘩だ／＼」

彌次馬が、どや／＼と人垣をつくつた。

男は息ぐるしいのと、血管を壓せられるので、眞赤になつて、目を白黒しながら

ら、しきりと呻りながら必死になつて、紳士の手を辛くも拂ひ退けたとき、またも一ツ、バタリと投げ出された。

「糞ッ」

男は満座のなかにサンクスの敗北に憤氣になつて、紳士の足に死噛みついて捻ぢ倒さうとした。

紳士の鐵拳が男の頭へ飛んだ。が、男は夢中に捻ぢ倒さうとする。紳士は危く打つ倒れやうとして、ドタリと尻餅を突いた。

「サア来いッ」

男は急に元氣を盛りかへして紳士に組みつかうとした。

そのとき、後から男の襟を引つ掴んだものがある。

「こらッ、やめんか」

鋭い権のある聲である。

男は、ビクリとして振りかへると、いつか群集を分けて現はれた警官であつた。

「ハ、ハイ」

男は急に意氣地なく縮みあがつた。

「不都合なやつだ。群集のなかで亂暴を働いて」

巡査は男を睨み据えた。

「へい、實アこの方が、さきに私に亂暴をしかけたので」

巡査はジロリと對手の紳士を見た。紳士は悠然と巡査を見据えてゐる。巡査はオヤツとしたやうに眼をそらした。

「嘘をつけッ」

「イエ、旦那。嘘ぢやござんせん。この方がさきに手を出したんで」

「黙つてゐらう」巡査は男を怒鳴りつけて、紳士の方へ、

「どうされたのですか」

と訊いた。

紳士は笑ひを含みながら、

「イヤ君、なに、この男がね、ホレ、そこにゐる少女、それを誘拐しやうとするんではないかと思つたのでね」

「はゝア」

巡査は、ちらりと車につかまつて顔えてゐる薫の方へ眼をやつた。

「アノ娘ですか」

「ウム」

と紳士はいひ捨て、そこを立ち去らうとした。

「ア、もしちと待つてください」

と巡査は呼びとめた。

紳士は、ちよつと不快な顔をしたが立ちとまつた。

巡査は薫のそばへ行つて、

「お前か、いつたいどうしたのだ？」

「ハイ……、アノ人が無理に私を車に乗せやうとしたのでございます」

「ウム。お前はアノ男を知つてゐるか」

「存じません」

「お前は、どこのものか」

「越後でございます。長岡近くの川袋といふところのものです」

「ウム。名前はなんといふ」

「椎谷薫と申します」

「ウム、椎谷薫だな」

このとき、どうしたのか、紳士の顔は、さつと蒼くなつた。そしてその眼は怪しく輝いた。

「どうして出京したか」

「ハイ……」

といつたが、薫は口籠つた。前島の名を出しては悪い。突差の間に薫は思つた。そして彼の女は機敏に、懐の手紙の利用を思ひつけた。

「こゝへ尋ねて行くのでございます」

と、さつき前島の與へた手紙を差し出した。

「ウム。さうか。フム、大分複雑してゐるやうだ」

と、紳士の方を見て、

「失禮ですが、一寸交番まで、お出でを願ひたいもので」

「さうか」

紳士は苦笑しながら肯首づいた。

「こらッ、貴様も来い」

と、巡査は佛頂面をしてゐる男を見ていつた。

二

「お名前は？」

と、巡査は紳士に問ふた。

交番の前へ、ドヤ／＼とついて来た群衆は、外に立つた二人の巡査に追ひ散らされた。

「ウム」

紳士は、ちよつと面喰つたやうであつたが、

「眞名子欽三郎、上富士前だよ」

巡査は、ハツとしたやうに、紳士の顔を見て小首を捻つたが、

「眞名子男爵閣下でございますか」

と訊くのである。

「さうだよ」

紳士は、ニッコリと笑つた。

「ハッ。失禮いたしました」

巡査は、恭しく禮をした。

「オイ、お前は、なんといふ」と、男の方を見た。

「はい、神田神保町の欣々亭の料理番で、五十嵐富太郎と申しますんで」

「欣々亭。アソコはブラックリストへ乗つてゐる評判の魔窟だが、フム、どうせい筋ではないな。オイこら、貴様はなぜこの娘を誘拐しやうとしたか」

「はい、旦那、串戯ぢやありません。誘拐なんぞしやうとはしませんので」

「では、なぜ、この娘を無理に連れ去らうとしたのか」

「はい、この娘は五ヶ年間二百圓の前借で、店で抱へた女で」

「フム。證據があるのか」

「ありますとも」

「見せる」

男は、ポケットのなかをさぐりながら、

「なるほど、家の旦那は、抜け目がねえや、かうしたときの用心に、ちやんと、證書を渡してあるんだ」

男は獨りごとをいひながら、一本の證書を差し出した。

「フム」

巡査は、スラ／＼と読みくだした。

眞名子男爵の顔には、惱ましい氣色が現はれた。

巡査は、その證書をポイト、テーブルの上へ投げ出した。

「なんだ貴様、これは多賀谷といふ周旋業との證書ぢやないか。馬鹿ッ、本人とは間接契約になつてゐるんだから、本人の引渡しは、多賀谷へ交渉しろ。多賀谷とこの娘の父親の椎谷平助と、どんな關係になつてゐるか、契約が、ほんとか嘘かもわからんではないか。不都合なやつだ。今後、かやうのことがあると、誘拐罪の告訴をするぞ。それから、この娘には直接に關係はないんだから、強迫がましい行爲がある」とゆるさんぞ」

「へい、恐れ入りました」

男は狐に抓まれたやうな顔をして、小さくなつた。

「閣下、お蔭で、魔窟へ陥入らうとする少女を救うことが出来ました。感謝いたします」

「巡查は、丁寧に眞名子男爵に挨拶をした。」

「ホー、さうか。思はぬ善行をしたことになつたの」

眞名子男爵は快活に笑つた。

「巡查は薫の方へ向つた。」

「お前、心配することはない。これから、このやうなことがあつたら、いつでも警察へ來なさい。警察では人民に不都合なことの無いやうに保護してやるのだから」といつて、更に、欣欣亭の富五郎の方へ向いて、

「こらッ、歸つたら欣欣亭の老爺にいへ、こんど不都合のことがあると、警察の方でゆるさんからとな」

「へい、恐れ入りました」

「巡查は、キチンと立つて、」

「閣下、恐れ入りました。どうぞ、お引取りください」

「ア、さうですか」

三人は、思ひ／＼の氣持ちで交番を出た。

富五郎は、つまらなさに嫌な顔をして、眞名子男を尻眼にかけて、スタ／＼と立ち去つた。

三

「お蔭さまで、どうもありがとうございました」

薫は愛らしい姿を、感謝に充ちた顔で、丁寧に挨拶して、ジーツとその恩人の顔を見入つた。そのとき、薫は異様な感じを受けた。眞名子男は、引きつけられたやうに、ジーツと薫の顔を見てゐたが、その眼にはなんともいへない不思議なつかしさがあつた。薫は、なにかしら、心の奥で求めてゐたものに、思ひがけなく打つ突かつたやうな心地で、刹那にいひしれぬ懐かしさを覺えた。

男爵は、ハツとしたやうに眼を反らした。

「ウム。危ふいところだつたの、まあよかつた。……」お前は昨宵の夜行で來たの

なら、もう八時、お腹が空いてゐるだらう……、さうだの。……その邊で朝食をとらう。……お出で……」

スラリとした立派な體格に、鼠色の合着の服に、玉子色が／＼つたちよつきの胸へ細い金鎖を這はせた男爵は、静かに歩み出した。

内氣で遠慮勝ちな薫なのであるが、この眞名子男爵の持つなにものかの強い力が彼の女を引きつけるかのやうに、彼の女は、つひ、その後へついて行かねばならぬやうな氣がした。

男爵は折々優しい、さうして憂はしげな眼を、微笑しく見せるかのやうに笑つてあちらこちらと、適當なところと考へるかのやうに、立ちとまつて、薫を振り向くのであつたが、

「さうだの、お前は田舎娘なのだから、天どんがいゝかな」

かう、獨りいつて、獨り肯首くと、つと、とある家へ入つた。

薫は、なんとも知れぬ、立派な人の、不思議な懐かしさを持つ人の後について入ると、男爵は、すぐと二階へ、ちらと薫を目で招いて、昇つて行くのであつた。二階には別に客もなかつた。

薫は、不審相に考へた。爺アに連れられて、長岡の角屋へ行つたときには、五人からの客が、二階にゐたのに、東京の、こんなに賑かなところで、こんなにお客がなにもなくつて、どうしてやつて行くのだらうと思つた。

白いエプロンを掛けた女中が、用聞きに來た。

「ア、天ぷら、イヤ、天どんがいゝな、上を二ツ。それから、ビールを一本くれ」

「畏まりました」

薫は餉臺を隔て、小さく座つてゐた。

男爵はその、ちよつといじけたらしく見える姿を、愠然としたといふやうな優しみのある眼で見ながら、

「お前は、一人で出て來たのかい」

と訊くのである。

「イ、エ」

薫は、すぐと答へた。

「フム、そして、その伴れの人はどうしたな」

「ハイ、都合があつて、私は行先きを教はつて、停車場で別れました」

「ウム。そうか。……、ア、さつき交番で見せたつたね、どれ、見せて御覽」

薫がすなほに出して見せると、男爵はその宛名の蔦屋和三郎といふのをジーツと考へながら見てゐたが、やがて、裏をかへして、前島透とかゝれたのを見ると、さも驚いたやうな顔をして、

「お伴れといつたのは、この御人かい」

といつた。

「ハイ」

「さうか」

男爵の顔には、ちよつと、晴やかな笑ひがのぼつたが、またちよつと曇つて、御両親は、お前の行先きは知つてゐるのだらうね」といつた。

「ハイ、爺アは知つてをります」

「して、母アさんは？」

「嬢アはございません」

「なに？、母アさんはない」

と、ちよつと男爵は驚いた氣色である。

「ハイ、七年前になくなりました」

「……さうか。母は懐かしいもの……それは氣の毒なことだつたのう」

薫は、なんとなく涙ぐましいやうな氣がした。

そのとき、女中がビールを運んで來た。

男爵はビールを飲みながら、なにやら考へ込みがちなやうであつたが、

「お前は、いくつになつたの？」

といつて、ハタと口を閉ぢた。

薫は、オヤツと思つたやうに眼を見張つた。が、それもすぐと消えて、恥かしさうに、

「十八でございます」といつた。

「フム。父さんは壯健かな」

「ハイ」

「なにをしてゐらつしやるんだな」

「渡守でございます」

「フーム、さうか……、東京といふところは、誘惑の多いところだから、決して父さんに心配をかけるやうなこととしてはならぬよ。女子はなによりも品行が第一。いつかは運の開けるときもあらうから、心を丈夫に、身體を大切にしなければいけない。それから、その前島とかいふ人に背かぬやうにしなければならぬ」

といったとき、女中は天どんを運んで来た。

男爵は、自ら蓋をとつて、薫に喰べよといった。薫は遠慮勝に喰べ了ると、やら男爵は代を拂つて立ちあがつた。

外へ出ると、

「始めての上京には、根津八重垣町といつても、訪ねるに困難だらう。俵をやとつてやらう」

男爵は辻待の車夫を呼ぶと、代を拂つて、行先きを告げ、送り届けるやうに呟附けた。

薫は、なんといつて、お禮をいつていゝかわからなくなつた。そして、放れ難い懐かしさに、たゞ涙ぐましく丁寧に禮をして、シートと男爵の顔を見上げたとき、男爵は、稍濡みを覚える眼で、微かに笑つた。

車夫は轆棒をあげると威勢よく走り出した。

男爵は、シートと見送る眼に涙が宿つてゐた。

薫は車上で、懐かしい疑問を抱へて考へつゝけた。

九 戀の策戦

上野櫻木町、寛永寺の前を眞つ直ぐに行くと、二丁ばかりのところに、白木の塀の、もう、風雨に晒された門柱に、前島詮三と表札の出てるのは、前島透の家なのであつた。

父詮三は、木彫家として、帝室技藝員の名譽を持つてゐるほどで、大家としてかくれもない人であつた。

歸つて來た透は、母の病を離れた座敷の病室へと訪づれた。

「ア、透かい。まア、それほどでもなかつたのに、呼びかへして氣の毒だつたね。妾も、こんなぢやなかつたのだが、老年のせいか、つひどなく陽氣あたりにかゝつたのよ。だけでもういゝ。どうだつたの、いゝものが描けなかつたかい？」

「ハイ、僕、お母さんが病氣だと電報を受けましたので、ビックリしましたよ。そんなら、いゝですけれど、僕、どんなかと思つたもんですから。お母さま、仕事の方は、思ひつけない拾ひものをしましたよ」

透は、ニコヤカにいつた。

「そうかい。それはよかつたね。どんなの？」

透は、ちよつと心に疚しいところのあるやうに顔の熱するのを感じたが、

「そりや素敵なんですよ。ほんとに純眞な田舎娘をモデルにして、アノ信濃川の葦のなかに、女神のやうに、イヤ、人間の持つほんとの美が、どんなものかといふことを暗示したものですよ」

白い敷布の上へ、心持ちまだ蒼みのある顔、それでも、たゞ陽氣あたりであつただけに、排泄があると、もう大したこともなくなつた母の文子は、悴の歡ぶのを我事のやうに、生き〜と目を輝かせて、

「そう。透、母アさんに見せておくれ」

といふのであつた。

「いま、持つて來ますよ」

透は、ニッコリとして病室を出た。

入れかはりに、辰代が牛乳をお盆に乗せて捧げて來た。そして、文子の枕元に座ると、

「お母さま 牛乳を召しあがらない？」

と、いつた。

「ア、頂きませうか。透が歸つて來たので、スツカリ病氣が癒つたやうな氣がする。起きませうかね……」

「デモお母さま、そんなになすつてもいい？」

「もう、大丈夫よ」

文子はニコ／＼と笑つて、靜かに起きあがつた。

そのとき、透は、まだ繪具のよ／＼乾かない梓張りのキャンバスを提げて、嬉しさに入いつて來た。

「これですよ。お母さん……」

と、いつて、

「お母アさん。そんなに起きてもいい／＼ですか」

と、半ば喜ぶやうな元氣な聲でいつた。

「ア、もう、いゝのよ」

優しく笑つた文子は、透の枕元の方へ、てふどそれは光線の光りを斜に受けて、

油繪を置くには適當なところであつた。

文子は恍然と眺めた。いかにもオツトリとした顔、汚れに染まぬ純眞に輝く瞳、

デリケートな女性の感じを代表したものではないかと思ふやうな優しい口元、かざ

り氣のない田舎娘の扮装。そして、自然の配置にも、娘が、その自然のなかに、な

んの不安もなく、シツクリと拵つてゐる心地よい構圖が、いふばかりなく懐かしい

ものにした。

「ア、美しい……」

と、文子はいつた。

辰代は、その畫面の娘の、變な扮装に、おかしいかのやうに、

「まア、田舎の人らしいこと、でも、無邪氣でいゝわ」と批評した。

「透や、ほんに純真な娘らしいの……アノ、この娘さんは、どうした娘さんなの」と、文子は笑みこぼれる気色でいつた。

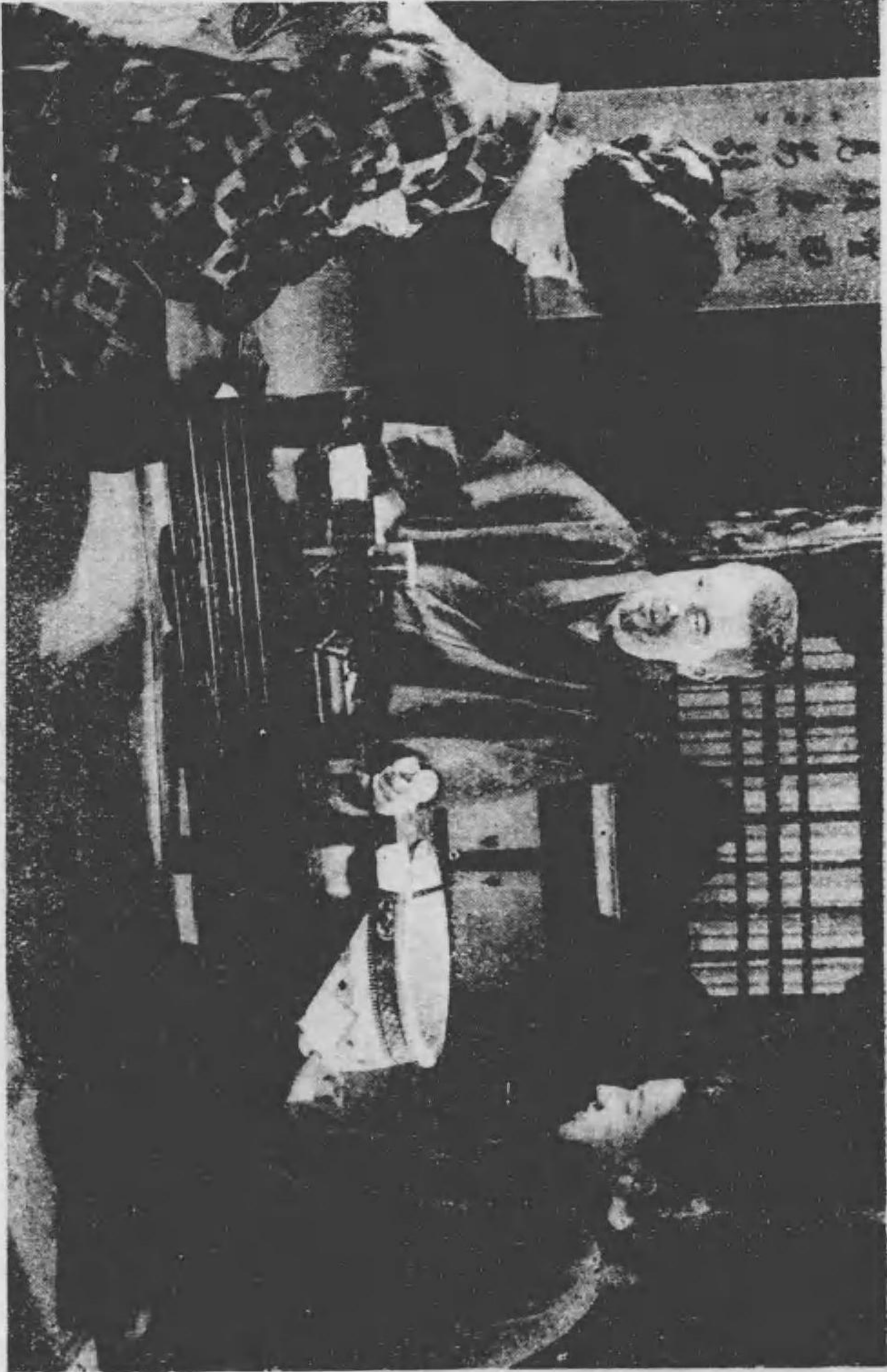
透は、母の好感が、この薫の繪にあつまるのを見ると、自分の計畫が、豫想どほり甘く運ぶと思つて、イソ／＼と心を躍らせていつた。

「なんでもお母アさん、村では、鶴のおとし子だとか評判されてゐるんですつて、そりや實際、優しい娘ですよ。こんなモデルはとても求めたつてありませんよ。お母さんは、どうした娘と思つて？」

と、透は、まづじらしていふのである。

「サア、妾には、わかりませんね」

と、辰代がさしで、いつた。



「兄さま、お茶屋の娘ぢやアない？」

透は、自分の誇りを傷つけられたかのやうに、

「お茶屋の娘だつて、串戯ぢやない。あんな俗悪な社會に、こんな清眞な型が持つるか。失敬なことをいつちやいかんよ」

と、ちよつと氣にさはつたやうにいふ。

「アラ、兄さん、大變に同情を持つてゐらつしやるわね」

辰代は、すぐと皮肉な言葉を、さほどの意味もなしにいつた。

透は、痛いところへ突かれたやうに赤くなつた。

「馬鹿……だな。僕の藝術ぢやアないか……」

やつと透はごまかした。

「デモ、なんとなく氣品のある顔立ね。」

文子は兄妹の軽い衝突に微笑みながら、話を反らせた。

「エ、お母アさん。もつと、いゝ感じの娘ですよ。僕の藝術では、とても、そのすべてを表現することは出来ないんです。……お母さん。貧しい渡守りの娘なんですよ」

「まア」

文子は意外のやうに驚いて、再びジツと畫面に見入つた。

二

「ヘイ、奥様、ごめんなすつてくださいまし。どうも、その後は、一向御無沙汰に打過ぎまして、つひその、商賣の方が忙はしかつたもんですから」

と、ペコくと頭をさげるのは、鳶屋和三郎である。

「景氣はどうかね」

と、やつと床拂ひをした文子は、まだ撫でつけのグル髪にして、心持ち頬にたる

みを見せながら、優しく笑つていつた。

「ヘイ、どうもかうも、世間ぢや、滅法界不景氣なもんでございますね。デモまア私等の方ぢや、お蔭さまで、お得意さまがいゝものですから、悪るいなかにもどうやらいゝ方でございます」

「それはまア、なによりだね。なんとといつてもこの節の世間ぢやのう。なにもかも、手控え〜で、ひきつめるばかりだから、何商賣にしても苦るしいだらうね……それはさうと、この間、女中が一人欲しいといつてやつて置いたつけが、思はしいのはありませんかい」

「實はツノ、今日のやうに幾人も〜來ますけれど、どうもその、これはといつたやうな、お邸の方へ向けられる代物が來ませなかつたもんですから……」

「そうかね。このごろは、女中さんだけは、不景氣知らずにハケ口があるつて話だが、やつぱり、氣の利いた娘は出ないものかね」

「ハイ。どうもその、ちよつといゝのは、自惚れが強くておキャンですし、さうでないのはボンクラと來てゐますから、なか／＼振り分けに面倒でございます。……こちら様のことも、いろ／＼心がけてをりますんですが、實は今、宅へ、遠縁の娘で、どこか奉公でもといつて來てゐるんですが、ちと、おとなしすぎるので、どうかなんと思ひまして」

「オヤそうかい……おとなしすぎるくらゐなら反つていゝぢやアないか。それに、お前の遠縁なら、素情も知れていゝ。どうだらうの葛屋。その娘を連れて來て見せてもらひまいか」

「ヘイ、モウ、こちらさまでおよろしければ、本人も大喜びでございます。それぢやア奥様、お目見えをさせて見ますで」

「ア、そうしておくれ。すぐとね」

「畏りました」

葛屋の二階では、前島が薫を訪ねて來てゐた。妻君のお仲は、餅菓子を買つて來て、お茶を淹れて、なにやら三人で話しをしてゐる。

「おかしく思はれては、僕困るんだがね。この人には事情のある人なので、實際、氣の毒と思ふので、なんとか力になつてやりたいと思つてね」

透は巧く話し込んでゐた。妻君は、ニヤリと妙な眼色で笑つたが、別に悪る氣もなく。

「透さんも、お目が高々ゐらつしやる」

と笑つた。そのとき、

「オーイ／＼ゐないか」

下でいふのは和三郎が歸つて來たのである。

「ハイ／＼、いま行くわ」

「ア、そこにゐたのか。どこへ行つた」

と、和三郎は、ノツコリ階段から入り口へ顔を出すと、

「アツ。透さん来てゐらつしやいましたか。いま、お邸へうかがつて来たんですよ。これから、薫さんを連れて行くんです」

和三郎は、ニコヤカに笑つた。

「薫さんは、扮装をよくしたら、立派なお嬢さんになる。なア、お仲、こう、透さんと薫さんを、二人ならべて扮装つて見たら、とてもいゝ若夫人が出来るぜ」

申戯のやうで、眞顔で和三郎はいふ。

薫は、ポツと赤くなつた。透は、ドキマギして、

「冷かしちゃア困るよ、薫屋」

といつた。

薫屋は笑つて、

「いやほんとに、俺がもしお父さまだつたら、イザコザなしにさうきめる、ハツハ

ツ〜」

「ハツ〜、薫屋のやうなお父さんを持つたら仕合せだなア」

透も笑つた。

若い男の、美しい女の世話、どの道、いはくなしには収まらぬと、和三郎もお仲も思つたが、薫の姿を見ると、この二つの雛を一緒に並べて見たい氣もするのであつた。

「ちア薫さん、お嫁入りだ。そのまゝでいゝですよ。前島さんでは、みんないゝお方ばかりだから」

薫は、はにかみながら立つた。が、なにか心憎えるやうな氣がしてならなかつた

* * * * *

薫は前島家の玄關の三疊の隅に、小さくなつてゐた。

「一向もう、世間を知らぬ人なんですから」

といふ蔦屋の聲がした。

「イヤ、結構よ」

と、奥さんらしい聲がすると、やがて蔦屋が立つて来て、

「こつちへいらつしやい」

といった。

「ハイ」

薫は、俯向きながら、ボウとした気持ちで客間のところへ入った。

文子は、ジーツと微笑みながら見たが、瞬間の印象は、申し分なしに及第した。

文子は蔦屋の顔を見て、ニッコリと笑った。

「ア、あんたかい。さア、遠慮はいりませんよ。これから、家の人になるんですからね、なにも気に置かずにね」

と、文子は薫の方を見ながらいった。

「どうぞ、お願い申します」

薫は恥かしい顔に櫻を散らして、ちらと文子の見た。そのとま、文子は、オヤツと思つた。彼の女は首をかしげた。

「どこかで見たやうな娘だ」

かう思つたのだ。が、どうしても思ひ出すことが出来なかつた。

「ほんに優しさうな人だね」

と文子はいった。そして、なにか思ひついたらしく、

「辰代」

と、振りかへつて、辰代の書齋の方へ呼びかけた。

「ハイ」

辰代は入いつて来た。ちらとあげる薫の顔を見ると、やはり、オヤツといった。

「お母さま、この人なの？」

と、辰代は不審さうにいつた。

「さうですよ……」

と、文子は辰代の顔を、なぜといったやうに見た。

「さう……」と、辰代は、なにげなくいつても、一べん薫の顔を見た。薫はもう、辰代が上野驛で自分に感づいたのではまいかと思ふと、身内の血が一時に沸くかのやうに赤くなつた。辰代は不審相な顔をしたが、

「お母さま、なに？」

といつた。

「アノ、松月へね、電話で、親子を五ツ、すぐにとねえ」

といつた。

「イエ、奥様、どうぞ、お構ひくありませんで」

と、鳶屋はいつた。

「折角、こんなにいい人を伴れて来ておくれたのに。ゆつくりしていつたらいゝわ」

「へい、いつもく、来るたびに、どうもすみません」

辰代は電話を掛けに出た。

そして、薫は、おさんのお吉にひきあはされた。お吉は、マジく、新米の上女中の顔を見た。なんて美しい人だらうといつたやうに。薫は、朋輩が出たので、少し寛いだ氣持ちになつた。そして、五人は笑ひながら賑かに親子丼を喰べるのであつた。

*

*

*

*

*

*

てうどそのとき、薫の國元では、親族寄合ひの會議であつた。それは、爺やが拘引されて、どう刑がききるかわからない。それについての後始末の評議、それから多賀谷が、親族を相手に、貸金の請求をして、金を返へすか、それとも、お松を渡すかといふ難題を吹きかけてゐるのであつた。で、結局、親類一番の口利きの五平

がなかに立つて、親類だつて、さうく世話も出来ない。だから、この場合、お松を引渡すこと。そして、それには女郎にだけはさせぬ條件で、五ヶ年間、多賀谷が自由に、お松の働きを収めること。さうした方が、平助の家のためにも、多賀谷にもいふこととて、お松が、多賀谷に連れて行かれるときであつた。

四

その夜、薫は、お吉と一緒に、女中部屋で、二人でなにかと話してあつてゐた。お吉は、きさくなお喋りやで、いろんなことをいつて面白く笑はせてゐた。彼の女も、やつと落ちついた氣持がした。

そのとき、透と辰代は二階の詮三の間で、なにやら三人で話してゐた。

「實はな、今日、眞名子男のところへ行つたのだ。するとな、いろく話しの末にふいと辰代のことについてお話しがあつたのだが……、それは、猛君な、アノ人も

もう二十二になつたといふことだが、それについて、もうそろく配偶者の心配をしておかなければならん。どうだらう、あんたのこの辰代さんを、猛の將來の嫁に欲しいと思ふのだが、婚約を結ぶ譯には行くまいか……といふやうな話ぢやつたが、かういふことは、今ときの若いものは、みなそれく理想をもつてゐるし、そして、本來が當人の問題なんだから、第一には、辰代の心をきくこと、第二は、その後見の立場にある透の意見もきくこと、かう俺は考へたのだ。で、まア俺の方は、文子とも話して、直名子男には、仕事のこと、いろくとお世話にもなつてゐるし、それに、猛君だつて、法科の秀才で、將來有望な青年だと思ふから、良縁ぢやアないかと思ふのだが、お前たちは、どう思ふ」といふのであつた。

透は、美術家と、政事家、だいぶと、その志す方面が違ふので、あまり親しく交際はしないのであるが、大體、男性的な、熱情家で、頼母しいところのある男と思

つてゐたのだから、

「僕も猛君なら、辰代のためにも良縁だと思ひますね」

といつた。

「フム。お前もさう思ふか。どうだな辰代。お前は？」

「ハイ」

辰代は、ジツと考へたが、

「ちと、考へさしてくださいますし」

といつた。

「フム。さうか。まあ、さう、急ぐわけでもないんだから。……よく考へて置くかい」

そのとき、文子は新米の仲居に來た薫をつれて、詮三の部屋へ入つて來た。

「お入いり」

と、次の方を見た。

薫は、襖のわきに小さくかしまつてゐた。

「あなた、こんど庸ひましたのは、アノ娘でございますよ」

と、文子は襖の方を指さした。

詮三はノビあがつて、スーツと見て、

「ア、さうか。愛らしい娘ぢやな……なんといふ名だつたッけな。ア、薫といつたね。イヤ、俺の家は、きはめて自由な家なんだから、そのつもりでゐておくれ」

薫は、みな優しい方ばかりだと思つて、お叩頭をした。

「デハ、下でお休み」

と、文子は、優しくいつた。

「ハイ」

と、薫が階下へ降りかけたとき。

「ア、眞名子男から、なにか透君に、いゝ製作が出来たら、欲しいものだといつてあつたよ」

かう、思ひだしたやうに詮三はいつた。

薫は、その聲に、不圖、懐かしい記憶を呼び起した。

眞名子男

それはアノ停車場で、不思議な懐かしさを抱かした人の名だ。

薫はなぜか、アノときの紳士のことが、胸から去らなかつた。彼の女は、自分が

平助爺やの實子でないといふやうなことも耳にしたことがある。そして、爺やは東

京のお邸にゐたことがある。

もしや。

かう思つて見ると、すぐその後から、卑しい自分が、どうして、そんな内情なぞのある身だらうと自ら打ち消さねばならなかつた。が、やつぱり、胸を去らぬは、



懐かしい眞名子男の俤であつた。

十 淪落の渦へ

神田神保町の欣々亭には、美しい女給が現はれた。名はお松、バツチリとした眼に、アドケない笑ひが、粹客の心を牽いた。まだ、都狎れない田舎風が、ことに彼の女を愛らしいものにした。

實業家として、かなりに知られた植木正之助は、ちよい／＼この欣々亭へ遊びに来た。彼は薄い唇の大きい口、平顔に狡猾らしい眼がシヨンボリと、どこか底光りがしてゐる。

「女將、近頃、變り種は出ないかい」
ダクリと腓の脹らみの顫えを見せて、寛濶に大胡座を搔くと、正之助はいつた。

「アラ、旦那、あつしやい。ホ、いつも相變らずに、精力絶倫であつしやるわね」

「ハ、ツ、精力絶倫は俺の生命だよ。なア、お女將もスツカリ昔の發展振りはなくなつたね、ハツ〜」

「オヤ、旦那、とんだところで昔の古傷を扱られますね。それはさうと、こんど素敵な玉を仕込みましたよ」

「ウム、さうか。どんなんだい」

正之助は、ムク〜と乗り氣になる。

「ホ、女のことつたら、もうあれだもの、旦那も、随分旺盛ね」

「まア、そりや、どうでもい〜さ。どんなだい、その玉つてのは」

「ビーナスの遺子で、舶來の箱詰よ。まだ、ににならないのよ」

「フム。大分と、前書がい〜やうだな。、、なら結構だ。一つなんとかなるまい

かな」

「そりや旦那、物は相談よ」

「例によつて抜け目がないな。そんなことはいふだけ野暴だよ。先刻承知だ」

「ホ、だいぶと、ハヅンであつしやるね。十露盤玉が達者なくせに……」

「オイ〜、さうくさすなよ。値打のあるものなら踏ん張るよ」

「さうねえ。、、の珍種で、滅多拜める代物ぢやないんだからね。一番ウンとハ

ヅンで貫はんでね」

「フン、、つて、保証づきかい」

「保証もなんにも、キュツと來ますよ」

「どうだ、片手で」

「は〜かりさま」

「お女將、五十圓だよ」

「五圓なら、龜戸あたりよ」

「十倍だよ」

「まア、ごめん蒙りますよ。山之字さんなら分りがいゝがね」

「デハ兩手。それならよからう」

「しやうがないね。この玉ぢや、ウンと儲けるつもりだつたんだが、外ならぬ旦那のことだものね」

「百圓の水揚料は、ちとひどいよ」

「嫌ならおよしなさいな。もつと値賣りが出来ますよ。萬龍は、ザラの、でも千圓までせりあげてよ」

「デモ、見ず百圓は、聞かない相場だぜ」

「さうねえ、その氣前に手を打ちませうよ」

「どんなだい」

「ハイヨ。松アちゃん……」

「ハイイ」

お松は、バタ／＼と小刻みに走つて来て、

「お女將さん、なアに？」

と、お女將の居間の處へ、あどけなく笑つて白い齒を見せてニツコリと笑つた。店の方には、五六人の客がゐて、外の女給たちが、キャツ／＼と笑つてゐた。なかには、大正琴を、獨り外れに弾き鳴らしてゐるのもあつた。

「アノね、シャンパンに、カキフライをね」

と、お女將は、ちらと植木の顔を見てニツと皮肉な笑ひを沿びせると、クスリと笑つて、その眼を松子に愛嬌らしく注いだ。植木はデレリとした眼を細くして、ニタ／＼と笑つてゐた。

お松がお女將の注文を傳へると、コック頭の富さんは、上目にちらりと女將の居間の方を見ると、

「チエツ、畜生、甘くやりやがるなア」

と忌ま／＼しさうに舌打ちして、

「あんな狎々老爺に、フン、勿體ねえや」

と呟いた。

が、お松には、その言葉の意味はわからなかつた。

そのとき、三人づれの若い洋服の男が來た。二人は、ちよ／＼來たことのある男、そして、いつも強いウキスキーを叩つて、亂暴な口をきく男たちであつたが。新規の男は、ちよつと上品な感じのする男であつた。

「オイ、欣々亭のスターといふのはどれだい」

と、無遠慮に、他の二人のものにいつた。

「アレだよ。どうだい君、すくなくとも、今晚の會計を引き受けるだけの價値はあるだらう」

「ウム、なるほど、こいつはい。初心らしいところに味がある……オイ、君」
上品な若者は、活潑らしいこの一團のカラリとした氣持ちに、おかしみを感じたお松の、無邪氣に微笑む顔を見て、笑ひながら呼んだ。

「いらつしやい」

お松は嫣然と笑つた。細かい白い齒並みが露はれて、一種の魅力を持つたお松の姿が近寄ると。若者はすぐとその手を握つて二ツ三ツ振つた。

「恵まれし女性は、呪はしき運命の犠牲となる。最も善良なる人間は、最も殘虐なる人生を経験する。オイ、君は、松アちゃんといふんだね。我愛するお松君のため

に乾杯する」

若者は、ペラ／＼と喋つて、グイとコップを叩つた。

「オイ／＼君、馬鹿に感傷的なことをいつてゐるな。よせよ。これだからブル出身

はいやになる、オイお松君、かはりだよ」

一人の男が、グツとコップを空けると、ガタリと卓子の上へ置いていつた。

お松は、おかしくなつて、袖で口を蔽ふてゐたが、

「ハイ」

といつて、バタ／＼と料理番の方へ走つた。

そのとき、またお女將がお松を呼ぶ聲がした。

お松が、再び、お女將の居間へ顔を出すと、

「お前ねえ」

と、お女將はニコ／＼しながらいつた。

「ハイ」

「この方をね」

と、ちらつと榎木の方を見て、

「家の旦那のどこまで、お送りしておくれ」

なにげない風にいつて、

「エプロンを外づしてね」

といつた。

「ハイ」

お松は、ニツコリと白い歯を無邪氣に見せて、スルリと、エプロンを脱ぐと、それを、つと上へあがつて、帽子かけのところへ引つかけた。

「サア旦那、いらしてくださいな。この娘が御案内してあげますよ」
お女將は、しら／＼しくいふのである。

「ア、さうか。松アちゃん。ごくらうだね」

植木は、ニタリと笑つて、帽子をとつた。

お松は、いやにニヤ／＼した狎れ／＼しい老爺だと思ひながら、

「イ、エ。デハいらつしやいませ」

と、先に立つた。

お女將は、大ニコ／＼で、

「ほんとに、旦那、この娘は、すなほな娘ですよ」

と、褒め言葉を浴せた。

三

欣々亭を離れて五六軒行くと細い路次がある。そこから入ると、杵屋と書いた門燈の家のなかから三味線の稽古の音がして、ズツと突き當ると、左りへ反れて、

陰氣臭く狭まくるしいところに、玄關の格子戸口に、小林と書いた門燈が、悄然と照らしてゐる。それが欣々亭のお女將の亭主の仙太郎の家であつた。

お松が、ガラリと戸を引きあけると、呼鈴がカラン／＼と鳴つた。

「旦那。お客さまよ」

とお松はなかへ聲をかけると、

「こゝでございますわ」と、植木にいつて、ニツコリ笑ふと、すぐとかへりかけた。

「オイ／＼君、松アちゃん、お待ちよ」

植木は、オヤツとしたやうに呼びとめた。

「ハイ。なにか御用」

と、お松が立ちどまつたとき、奥から仙太郎が、いつもの絹物のドテラを着て、片手を懐に入れて、ヌツと立ち出た。植木を見ると、ペコ／＼と頭をさげて、ヘイと笑つた。

「ア、旦那でござんしたか。こりやどうも」
 と、キロリと、持前の眼をギョロつかせて外へ走らせたが、
 「ア、お松か、こつちへお入いり」
 といつた。

植木は自分のうちかなどのやうに、無遠慮に、家の主人の仙太郎にも別に挨拶らしい挨拶をするでもなく、

「どうだね。藤の見頃になつたね。龜戸へ行つて見たかね」
 と、ニヤリとして仙太郎にいつた。

「ヘイ。さうでございますね。まだ、いつてみませんが、見頃でございませう。お供をいたしませうか」

「さうだね」

植木はそれなりに奥へ入ると、トン／＼と二階へあがる氣配がした。

お松は不審さうに、植木の態度の應酬なのを見てゐた。まるで、この親方さんかなどのやうだと思つた。

「お松、お前も二階へ行くんだよ」

仙太郎は、ジロリとお松を見ると、ニヤリと無氣味な笑ひを流していつた。

お松は變な豫感に襲はれて、モジ／＼と後退つた。

「愚圖／＼してゐないで、お出でよ」

仙太郎の眼が凄く閃いた。

お松はその眼を見ると、ハチかれたやうに、命令に従はねばならなかつた。

仙太郎は、お松の後からのぼつて來た。

「旦那、生娘ですからね。人間の固いところが千兩でさア」

ニヤ／＼と笑ふと、首を縮めて降りていつた。

お松は、オヅ／＼と入り口に座つた。

「オイ〜大將〜」

植木は降りかけた仙太郎を呼んだ。

「松アちゃん。なにが好きかな」

と、植木は、ニコ〜しながらお松の顔を見ていつた。

なんのことやら、やうすがわからぬので、お松はボンヤリしてゐた。

「松アちゃんに、なんでも、好きさうなものをとつてやつてもらひたいな」

「へい〜承知いたしました。オイお松、旦那のおつしやることをきくんだよ。な

ア、さうすりや、なんだつて、欲しいものがあれば買つて貰へるし、お前の幸福になるんだからなア」

といつて、仙太郎は降りて行く。

「こつちへお出で……アハ、恥かしいか……さうさな。松アちゃんに、なにを買つてあげやうかな。指輪がいゝかな。それとも腕時計がいゝかな」

と植木はいつて、

「ドレ〜。一つ、脈を見てあげやうかな」

テク〜と植木はお松の側へ歩みよると、後からそつと寄つて撫でるやうに、お松のスナリと細長い指を、ゴテ〜と太つた手で捉ひあげると、ハ、と笑つた

四

お松の指には、いつか、ルビーの入つた細い金の指輪が箱められてゐた。そしてそのころから、お松は、どこかしら蓮葉なオキヤンな性質が現はれて來た。

「あたしにも頂戴な」

ピールの味を知つたお松は、遠慮なしにお客のコップを取りあげた。

「松アちゃん、あげやう」

客はかうしたお松の無遠慮をかへつて、嬉しい愉快なものとした。そして、飲み

かけのコップをお松の口へ當てがつて、そのまた残りを自分で飲んで、無性に嬉しがつてゐる。

お松はもう、押しも押されもしない欣々亭一の人氣ものになつた。

そのころ、よく来るのは、猛さんと呼ばれる青年であつた。いつぞやの晩、手を握つて妙なことをいつてゐた男である。

「オイ、松アちゃん、ビール。それから、カキのオムレツ」

「ハイ、三人ね」

嫣然と笑つて、注文を揃へて持つて來ると、

「まアお掛けよ」

猛さんは、いつも優しく、自分の側へお松を掛けさせて、そして、やはり外のお客とおなじやうに、彼の女に、コップのビールを飲み別けにすることに愉快を感じてゐるやうであつた。

その日は猛さんはなにやら雑誌を抱へて來た。そして、そのなかの寫真に出てゐる女優の姿を出して、お松に示しながらいつた。

「君、僕等はずいぶん民衆劇壇を組織しやうと思ふんだがね。僕等はさうして劇の力を借りて、社會の改造をしやうといふんだ。今の世のなかは、なに一つだつて、僕等の満足するやうには出來てゐないんだ。まるで動物園の獸のやうだ、少數の人間の外はみんなアノ獸のやうに、不法に囚はれてゐるのだ。だが、まだ醒めない人間は、アノ檻のなかの獸が、與へられる餌食に狎らされて、なんの不平もなく、おとなしくしてゐるやうに、自分のなんであるかを忘れてしまつてゐるんだ。だから、僕等の計畫は、さうした無智を、マザ／＼と寢呆けた世人に見せつけてやるやうに劇に仕組んで見せつけてやらうといふんだ。これは、ホレ、帝劇の森田郁代さ。こいつは、日本一の金持と妥協してゐるんだ。つまり、人生の裏切りものだよ。僕等は、そんな不眞面目な不純なものぢやないんだ。松アちゃん、君がもし、僕等の劇

團のなかへ入れるといふんだがなア。ほんとに、こんなに、人気を取るくらゐは譯ないよ。なア、オイ小山。松アちゃんを、こんなところへクスブラして置くのは惜しいもんだなア」

「ウム、まア猛さん、よせよ。そんなことをいつたつてはじまらないぢやアないか君のお松君への同情ぶりは恐れ入るぜ」

「フ、ン、ハツ〜。だが、僕は、淪落の渦のなかに、性格の破端を現はしてくる無残なものを見ると、たまらないよ」

かういつて、猛さんはコップを空けた。

「ハイ」

お松はヒラリと指をハネて、ビールの瓶をとつた。猛はその指に、ピカリと金光りを見出すと、その手をやはらかくつつた。

「フム。人生を冒瀆する、悪魔の暴逆の記念だ」

猛さんはちよつと眉をひそませる、お松はこのとき、なにか自分の暗い裏面の秘密にさはられたやうに憎えるやうな気がして、

「アラ、嫌ですわ」

といつて、その手を振り切ると、エブロンの下へかくしてニッコリした。

「ハツ〜。呪はしき運命の刻印だ。松アちゃん。お上り」

猛さんは、飲みかけのビールを、その手にしたコップをお松の口へ持つていつた「ホ、、そんなに猛さん、あたしの顔を見ては、きまりが悪るいわよ」

お松は笑ひながらガブ〜と呑んだ。

五

お松は猛さんから抜きとつた敷島を、キラ〜と光る指輪の手で、スバ〜と吸つて、パツ〜と吐き出してゐた。と、富さんの鋭い聲がした。

「オイ、松ちゃん、なにしてゐるんだい。ポヤ／＼してゐやがるな。早くしまひねえよ」

このごろ、どうしたものか、富さんはお松につらく當るのであつた。お松はピクリとして、パツと吸殻を、灰吹きの中へ投げ入れた。

「すみません」

とりちらされた食器を持つて、料理場の方へ持つて行くと、富さんは恐い眼で睨みつけるやうにしてゐる。

お松は怖々と置き場へ置かうとすると、富さんは、グイとその手を掴んだ。

「愚圖／＼してゐやがるなツ」

グイと一つ振つた。憎えたお松は、思はずカラリと皿を打ち落した。皿は、グワサリと音を立て、割れた。

「畜生ツ」

富さんは、嚇つとしたやうに、いきなりお松の小鬚へ、ビシヤリと一つ、平手を喰らはした。

「なにしやがるんだい、太い畜生だ」

「ごめんなさい」

「氣をつけろい」

富さんは、も一つ、その優しいお松の頬を、ビシヤツと撲りつけた。

「田舎のポット出のくせに、生意氣だよ、こいつは……」

富さんは、まだ、ブツ／＼いつてゐる。

お松は口惜しさに、ジクリとそこへ蹲つて構ひ板に身を凭せると、クシリ／＼と泣き出した。

「態ア見やがれ。剛情尼め」

富さんは、悪罵を浴せながら、ヤケに、ガチャ／＼と器物の音をたてた。

朋輩連中は、一時、オヤツとしたやうに、ボカンと立つて、氣の毒さうな顔をしたが、やがて、

スト、ントンと戸を叩くウ、

主さん来たかと出て見ればア。

と、呑氣らしく、スト、ン節を唄ふて、ガタリビシリと、戸締りをはじめた。

「いつまでも、泣いてるれい」

富さんは料理を了つて、二階へ引き取りさまに、そこに泣いてゐるお松に憎態なことをいつた。

お松は反抗をもつた目を、袖の上へのぞかせて、ジーツと見ると、富太郎は、フンと冷笑つてトン／＼と二階へのぼり入つた。

そのとき、朋輩の一人が、やさしく肩を撫でた。

「松アちゃん。我慢をし。アン畜生ッたらありやしないわねえ。憎くらしいヤツ」

といつて、その女給は。二階をちよつと睨めていつた。お松はいくちか慰められた心地で、微かにシク／＼と泣いてゐた。

十一 悲しみと喜び

—

薫には、心嬉しいやうな日がつゝいた。文子も、辰代も、やさしく、この純な田舎娘を遇してくれるのであつた。

「さうだね辰代、薫に、お前のアノ伊勢崎めいせんのキモノをあげたらどうだい」
 紡績もの、いかに田舎物くさい柄ものを着てゐる薫に、もしきれいなキモノを着せたら、キット、心地のよい娘が出来るに相違ないと思つた文子は、かういつて辰代をかへりみた。

「さうねえ。薫ちゃんなら、キット似合つてよ。あげやうねえ」

辰代は、美しい無邪氣なお相手の出来たことを心地よく思ふらしく、なんの惜しげもなくハタ〜と自分の居間へ入ると、もう、自分には古くなつて入用のない、かへつて新らしくねだるに都合のいゝ、お古のお拂ひかなどするかのやうに、間もなくニコ〜と笑ひながら、キモノを抱へて出て来た。

「薰ちやん、着て御覧。お前にはキツと似合ひますよ」

薰は、まだ来てから、あまり長くもならぬのに、こんなに好意を受けることの、なにか勿體ないやうに思はれた。

「デモ、わたし……」

と、顔を伏せて、自然と流れる微笑をかくすかのやうに、羞らつてモジ〜した「なにいゝんですよ。もう辰代の着用にはならないのだからね。貰つてお置き」

「ハイ」

「着て見なさいよ」



辰代は、かういつて、着物を開けて見た。薄のくづしに、蝶の型が織り出されて心地よい觸覺のする、その、サラリと滑るキモノを、薫は嬉しさうに見た。

「ハイ」

薫は自分たちの間へ行つて着換へやうとすると、

「いよ、こゝでね……辰代。着せておやり」

と、文子は微笑んだ。

「さうねえ。……、アラ、襦袢を一枚あげやうかしら」

と、辰代はまた、ハタ〜と行つて、ちりめんの刺繡の入つた半襟のかゝつた襦袢をとつて來た。

さながらに、妹かなどに扮装をしてくれるかのやうに、辰代は世話をするのである。薫は、かうして人前の衣更へに差しひながら、辰代の重ねてくれたキモノを肩へすべらせたとき、透が、ノツコリと出て來た。彼は薫の、かうした姿を見て、オ

ヤツとしたやうに立ちとまつたが、やがて、ニッコリと笑つた。そして、
「なにをしてゐるんです……」

と晴やかな聲でいつた。

薫は、思はず赤くなつた。

「お仕度屋さんよ……」

辰代は薫の裾に膝をおとして、ピン／＼と、キモノの着込みをなほしながら、ちらと透を振りかへつていつた。

「イヤウ、素敵な美装術屋さんだなア」

透は、かうした、シットリとした家庭的な感じに、我知らず快心さうに笑つていつた。

「あたしの製作よ」

辰代は、おかしさうに笑つた。

「ハツ／＼／＼、辰代の製作かい。なるほど、それぢや、出来上りを見なくつちやならんね」

と、透は笑つたが、

「ハツ／＼／＼、コリヤ似合ふよ。スツカリ、薫ちゃんのやうすが變つたよ」

といつて、笑ひながら、恍然と薫の姿を見た。

「オ、い／＼／＼。ほんにこの娘は、さうして見ると、上品だよ」

文子は、かういつて、人のよさそな笑ひをした。

二

薫はその日、辰代に教はりながら、料理のお手傳ひをした。アルミの鍋に淡水を入れて、瓦斯コンロにかけると、辰代は鹽をほどよく見はからつて振り入れるのであつた。

「アラ、お嬢さま、鹽をお入れ？」

かういつて、薫は不審相にいつた。

「オヤ。薫ちゃんここでは、なにを入れるの？」

辰代も、いぶかしさうに問ひかへすのである。

「おしたじをさしますわ」

と、薫は笑つた。

そのとき、ナガシ端で、ガタコト、ジャブ〜となにやら炊事をやつてゐたお吉は、ク、ツと笑つて、

「薫ちゃん、ウシホ煮よ」

と、物知りらしくいつた。

「お吸物とは違つて」

薫は、小首をかしげていつた。

「ホ、、、お吸物でも、薄鹽といふのは別なのよ。でもこれはね、ほんとの魚の味を味はふんだからね。お砂糖も入れないの。ほんの鹽だけなの。ホレ、こんなに煮沸とね、鯛のお頭を入れるの……」

辰代は鹽加減を見たりなぞしてこしらへあげた。

かうした、まるで家族のものゝやうな親しみのなかに、薫は笑ましい日を送る自分の幸福を思ひながら、彼の女は、ホカ〜と照る春日に庭へ出て見た。

ツゲの木が、小さな蒼いドーム型をつくつて、クキリ〜と置かれたなかに、丁木型の臺の上に、いま盛りの皐月の花が美しく、臺もかくれるばかりに咲きこぼれてゐた。詮三の自慢の酒中の月。燃えるやうな紅が、白にかゝつて、ボタ〜と、濃艶な花を、躍るやうに垂れさがつてゐた。松や、白楊の木を通り抜けると、透の書齋のすぐ側へ出る。

透は、恍然と、春日のさす庭を、窓に凭つて眺めてゐた。